
空っぽの心

アキ × 美波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空っぽの心

【Nコード】

N2580P

【作者名】

アキ×美波

【あらすじ】

突然、大事な人が倒れた。

そして…彼女は大切なものを失った。

第1話 彼女の笑み（前書き）

今日から連載を始めます。

第1話は短いですが、よろしくお願いします。

第1話 彼女の笑み

大事な人が突然倒れた。俺のとても大事な人。
それ以来、彼女の中から大切なものが無くなってしまった…。

「たっちゃん、早く〜」

遠くから佳奈が呼ぶ。新山佳奈^{にいやまかな}…俺・竹中達也^{たけなかたつや}の世界で一番大事な人だ。俺と佳奈は、今日で付き合い始めてから2年になる。今日は、記念のデートをしている。

「も〜早くしてよ」

「ごめんごめん。佳奈が元氣過ぎるんだよ」

「違うつて。たっちゃんが元氣無さ過ぎるんだよ」

そう言われてしまうと何も反論できない。

「どうしたの？ 怒った？」

佳奈が心配そうに俺を見る。俺は佳奈のこの顔が一番、苦手だ。
俺は佳奈と付き合ってから、1つだけ絶対に決めていることがある。
それは『何があっても佳奈を悲しませることはしない』ということ。

だから俺は…佳奈の不安そうな、悲しそうな顔を見ているだけで、かなり苦しくなる。

「そんなに怒るわけないだろ。何、気にしてるんだよ」

そう言っただけ俺は佳奈の頭を撫でた。

「だって…だって、たっちゃんが怒ったと思ったんだもん」
「今日は特別な日なんだから、そんな顔しないでくれよ」

俺は、だんだん佳奈と目を合わすことすら出来なくなってきた。

「うん。ごめん…」

「じゃあ、笑って」

「うん！」

俺がそう言っていると佳奈はニコツと笑って、こっちを見た。俺の一番好きな顔だ。

「やっぱり佳奈は笑顔が似合っているよ」

「そう？　ありがとう」

佳奈が満面の笑みでこっちを見る。俺は、それだけですごく幸せだった。こんな時間がずっと続けばいいと思った。でも…佳奈が心から笑ったのは、この時が最後だった…。

第1話 彼女の笑み（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

第2話以降も頑張ります！何かありましたら、感想などお願いします。

第2話 失ったもの（前書き）

第2話です。

よろしくお願いします。

佳奈に異変が…

第2話 失ったもの

デートも終わりに近づき、そろそろ帰ろうと思っていた時、信じられないことが起こった。

『ボタン！』

俺の横で何かが倒れた音がした。俺は恐る恐る横を見た。

「佳…奈？」

俺は、その光景を飲み込むまでに時間がかかった。さっきまで元気だった佳奈がそこにはいなかった。佳奈は倒れていた。何が何だかわからない俺には、どうしようもなかった。

「ちょっと！ 大丈夫ですか！？」

女の人が駆け寄ってきて佳奈に呼びかける。俺は、まだ信じるこ
とができなかった。

「救急車、呼んできます！」

異変に気づいてくれた男の人がそう言った。その言葉でようやく
俺は我に返った。

「佳奈！ 佳奈！」

何度も大事な人の名前を呼ぶ。佳奈は全く反応しなかった。

30分後、やってきた救急車に佳奈は乗せられた。俺も一緒に救急車に乗る。俺はずっと佳奈の名前を呼び続けた。

「佳奈！　しっかりしろ！　目を開けてくれ！」

俺は何度も叫んだ。だが、佳奈が目を開けることは無かった。救急車に乗ってから15分、病院に到着。すぐに佳奈の診察が始まった。俺は『待っててください』と言われたので待合室のソファに座って、佳奈の診察が終わるのを待った。

「達也くん……」

俺が待っていると佳奈のお母さんがやってきた。ずっと心配で泣いていたのだろう、目が腫^はれている。俺は軽くお辞儀をした。佳奈のお母さんは俺の隣に座った。

「……………」

俺と佳奈のお母さんとの間に重たい空気が流れる。時計を何度も見たが、進む時間は1分くらい。まるで時が止まったかのような感覚に襲われていた。それから15分後、

『ガチャ』

ようやく診察室のドアが開き、医師が出てきた。

「先生！ 佳奈は！ 佳奈は大丈夫なんですか！？」

「お母さん、落ち着いてください。詳しい話は診察室でお話しますから」

医師がそう言い、佳奈のお母さんは診察室へと案内された。その時、

「達也くんも先生の話、聞いて」

佳奈のお母さんにそうわれ、正直びっくりした。まずはお母さんだけで…と思っていたからだ。

「いいんですか？」

「何か私、達也くんは、この話を聞かなければならない気がするのだから…」

「わかりました」

俺と佳奈のお母さんは診察室へと入った。

「まず、命に別状はありません」

医師に最初に言われたのは佳奈の命についてだった。『別状がない』ということを書いて、すごく安心した。

「先生、佳奈は何か病気なんでしょうか？」

「いえ、病気ではありません」

「じゃあ、何で…？」

病気じゃないのなら、何で佳奈は倒れたのだろうか…？ 俺は訳がわからなかった。

「佳奈さんは貧血と低体温で倒れたんです。意識を失うほどでしたので、よっぽど重たい症状でしょう」

貧血と低体温…普段、元気な佳奈を考えると関係が無い気がした。確かに貧血と低体温は症状が重くなると大変だ。俺も経験したことがあるから、わかるが…頭痛や吐き気が酷くなり、冷や汗が止まらなくなる。立っていることさえ辛くなるほどだ。でも…貧血と低体温で倒れた、ということは聞いたことがない。そんなに重たいのなら『別の病気では？』と思ってしまう。

「あの、先生。佳奈は何ともないんですか？」

「それはですね…」

医師は何か言いずらそうにしている。貧血と低体温が原因で何かあるのだろうか。

「聞いて驚かないでくださいね…。佳奈さんは一生、笑うことができないかもしれません」
「えっ？」

その言葉の意味を俺も佳奈のお母さんも理解することができなかった。

「佳奈さんは『笑う』ということを手放してしまったようです」
「先生、でたらめなことを言わないでください！ 何故、佳奈が笑わないって言えるんですか！ どこにもそんな証拠は無いじゃないですか！」
「達也くん、落ち着いて」

俺は、つい大きな声を上げてしまった。佳奈から笑顔が消える…そんなことを受け入れることなどできなかった。

「佳奈さんの脳を調べさせてもらいました。佳奈さんの脳は感情を司る部分の中でも笑うことの中樞が傷つけられていたんです。私たちも驚きました。この症状は1億人に1人の割合と言われているので…」
「……………」

俺も佳奈のお母さんも何も言えなかった。俺は、この医師を信じることができなかった。

「信じられないとは思いますが…」
「先生、治すことはできないのですか？」
「残念ながら、今のところありません」

医師から残酷な言葉が告げられる。佳奈のお母さんは泣き崩れた。

俺は、どうすることもできず、ただ立ちすくんでいた…。

第2話 失ったもの（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

医師から告げられたのは佳奈が失ったものが『笑顔』だということ。
佳奈は本当に『笑顔』を失ったのか…？

第3話も頑張って書きますので、よろしくお願いします。

第3話 信じることは1つ（前書き）

医師から、佳奈は笑顔を失ったと言われた達也と佳奈のお母さん…。
佳奈は本当に笑顔を失ったのか…？

第3話 信じることは1つ

「……………」

医師から残酷な現実を告げられた俺と佳奈のお母さんは、待合室に戻っていた。もちろん、会話など無い。お互いに現実を受け入れられない。いや、受け入れたくないのだ。

「佳奈はね…」

そんな沈黙を先に破ったのは佳奈のお母さんの方だった。

「佳奈は、いつも達也くんの話ばかりしてたわ。帰ってくる度に必ず達也くんの話をしていた。すごく幸せそうだったわ。私は、そんな佳奈の笑顔を見て、元気になれた。でも…もう、佳奈の笑顔は帰ってこないのよね…」

佳奈のお母さんは再び泣き出してしまった。そんな佳奈のお母さんを見て、俺は苦しくなった。『佳奈の笑顔は帰ってこない』と佳奈のお母さんは言ったが、俺は考えたくもなかった。俺の一番好きな顔が見れなくなるなんて…きつと佳奈は笑顔を見せてくれる。そう俺は信じた。

「新山さん、佳奈さんの意識が戻りました！」

佳奈の意識が戻った。俺は不安に押しつぶされそうになっていた。もし、本当に佳奈から笑顔が無くなっていたら…いや、何を考えているんだ俺は。大事な人のことを信じられなくてどうする…。大丈夫、きつと佳奈は笑ってくれる。笑って『たっちゃん』って呼んで

くれるはずだ。そう思いながら、俺は佳奈のお母さんと一緒に病室へと向かった。

病室に入るとすぐに佳奈を見つけることができた。見たところ佳奈に変化は何もない。ただ、表情を見ると少し悲しそうに見えた。

「佳奈！」

佳奈のお母さんが名前を呼ぶと佳奈は、こっちを向いて

「お母さん！」

と言った。佳奈も佳奈のお母さんも泣いている。

「佳奈、大丈夫なの？」

「うん。大丈夫だよ」

それから佳奈は俺に気付いた。

「たっちゃん……」

佳奈は俺を見て、すごく悲しそうな顔をした。俺の苦手な顔だ。

「どうしたんだよ、佳奈？」

「今日は大事な日なのに…ごめんね」

「佳奈が謝ることじゃないだろ。気にすんなよ」

「ありがとう」

そうは言ったが、佳奈の表情は悲しそうなまま。こんな時はいつも…

「佳奈、そんな顔するなよ。笑って」

「う…うん」

佳奈がそう言うが、表情は何か複雑そうな表情をしている。

「佳奈？」

「たっちゃん、『笑う』って何だっけ？」

「えっ？」

「『笑う』って何？」

頭の中に医師から告げられた残酷な言葉が思い出される。

『佳奈さんは一生、笑うことができないかもしれません』

こんなことがあっていい訳がない。今は意識が戻って間もないから笑えていないだけ。明日になれば絶対に笑ってくれる。俺は、そう信じるしかなかった…。

第3話 信じることは1つ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

はたして佳奈の笑顔は戻るのか…？

第4話も頑張ります！！

第4話 決意（前書き）

第4話目です。

佳奈の笑顔が戻らないことを受け入れることのできない達也。悩んだ達也が出した答えは…？

第4話 決意

翌日、俺は佳奈の入院している病院に来た。昨日は笑ってくれなかったけど、今日は1日経ったし、佳奈も落ち着いただろう。佳奈の笑顔が見れるはずだ。そう思いながら、俺は病院に入り、佳奈の病室へと向かった。

「佳奈」

「あつ… たっちゃん。お見舞いに来てくれたんだ。ありがとう」

その言葉とは裏腹に佳奈に笑顔は無かった。俺は佳奈の『ありがとう』という言葉に嬉しさを感じることができなかった。

「たっちゃん、どうしたの？」

俺が考え事をしていると、佳奈が俺の顔を覗き込んで言った。

「い… いや、何でもない」

そう言っつて、俺は笑う。そうだ、きっと佳奈は俺が笑ってなかったから、笑わなかったんだ。しかし、俺を待っていたのは残酷な現実だった。

「？」

佳奈は、ただ首を傾げていただけだった。もちろん、笑顔は無い。俺に受け入れたくない現実がどんどん迫ってくる。『佳奈が笑わない』という現実がすぐ側までやってきていた…。

俺は一旦、病室から出て、待合室のソファに座って考えた。30分、1時間、2時間…どんなに時間が経っても自分の中から出てくる答えは1つ…

『これは夢だ。現実なんかじゃない』

これだけだった。

「こんにちは」

そう思っていた時、嫌な声がした。俺はゆっくりと顔を上げる。そこには予想通り、残酷な現実を告げる医師がいた。

「あなたは佳奈さんの彼氏さんですよね？」

俺は、この人の質問に答えなくなかった。きっと質問に答えたら、また残酷な現実が待っているから…

「佳奈さんの笑顔を取り戻す方法が1つあります」

予想していなかった言葉が俺の耳に届く。

「えっ？」

「あなたが佳奈さんを笑わせてあげればいいんですよ」

「佳奈は俺が笑っても笑ってくれませんでした…」

「たった1回で何を落ち込んでいるんですか。佳奈さんは記憶喪失になった訳ではありません。あなたが自分の彼氏だということも佳奈さんはわかっています。佳奈さんは明日、退院できます。佳奈さんが笑うかは…あなた次第なんですよ」

その言葉を聞くと急に怖くなった。佳奈の笑顔が俺にかかっている…

「じゃあ、私は診察があるのでこれで。そうそう、私、田中と言います。何かあったら、呼んでください」

そう言っただけで田中医師は診察室に戻っていった。佳奈の笑顔が俺にすべてかかっているという重圧と俺が取り戻すという気持ちとがぶつかり合っている。佳奈の笑顔は取り戻したい。でも、俺がダメだったら…一生、佳奈は笑わない。

「どーすりゃいいんだ…」

結局、答えが出ないまま俺は佳奈のいる病室に戻った。

「たっちゃん、どこ行ってたの？ 何も言わないで何時間も戻ってこないから心配したんだよ」

佳奈は少しお怒り気味だった。

「ごめんごめん」

そう言っただけは笑った。今、佳奈に心配をかけてはいけない。絶対に。とにかく佳奈の笑顔に繋がる話をするんだ。

「……………」

お互いの間に何とも言えない空気が流れる。何か話題を…こんな時に限って何も思いつかない。

「ねえ、たちちゃん」

この沈黙を先に破ったのは佳奈の方だった。

「な…何？」

何故かわからないが、いつも以上に緊張した。

「私…笑うことを忘れちゃったんだよね…」

「……………」

佳奈が悲しそうにそう呟く。俺は何も言えなかった。

「たちちゃん、笑えない私のことを好きでいてくれる？」

「…うん。当たり前だろ。佳奈のことが俺は大好きだ」

確かに佳奈から笑顔が無くなったのは辛い。だけど…だからと言って俺が佳奈を嫌いになるなんてありえない。俺は佳奈が大好きだから。

「たっちゃんは優しいな…」

「佳奈、そんな顔するなよ」

俺は佳奈の表情があまりに悲しそうで直接、見ることができなかつた。

「ありがとう」

『ありがとう』…佳奈のこの言葉で俺の涙腺は限界だった。

「たっちゃん、どうしたの？」

俺の目からは涙が止まらなかった。そして、俺は1つの決意をした。

「わっ！ たっちゃん？」

俺は佳奈を強く抱きしめる。

「佳奈…絶対…絶対に佳奈が笑えるように俺、頑張るから。絶対に俺は佳奈から離れないから」

「たっちゃん…ありがとう」

いつ佳奈の笑顔が戻るかわからない…俺は何日、何ヶ月、何年経ったとしても必ず佳奈の笑顔を取り戻す、そう決意した。

第4話 決意（後書き）

読んでくださったありがとうございます!!

佳奈の笑顔を取り戻す決意をした達也。これから待っているものは…？

第5話以降も頑張りますので、よろしくお願いします!!

第5話 初めて出会った場所（前書き）

第5話目です。ようやく今年一発目の更新です。

だいぶ遅れてしまってますみません。

『佳奈の笑顔を取り戻す』そう決意した達也が考えたことは……？

第5話 初めて出会った場所

『佳奈の笑顔を取り戻す』

そう決意した次の日、佳奈は予定通り退院した。俺は仕事だったため、病院に行けなかったのだが、佳奈からメールが来ていた。

『たっちゃん、予定通り退院したよ。いっぱい心配かけちゃってゴメンね。これからもよろしく』

メールだけ見ると、佳奈が笑顔を失ったなんて考えなかった。俺は改めて、これまでのことを振り返った。2日前、佳奈は笑顔を失った。俺とのデートの最中に急に倒れた。俺は、どうすることもできずにただ見守ることしかできなかった。そして残酷な現実が告げられた。聞いた瞬間は夢だと思った。『きっと夢だ。これは現実じゃない』。目を覚ました佳奈に会いに行つて、現実を受け入れるしかなかった。でも、どうしても現実を受け入れられない俺は次の日になれば佳奈は笑ってくれると信じた。けど…昨日、俺の信じた通りにはならなかった。それとともに現実を受け入れた。そんな時、田中医師がやってきて、俺に1つの方法を告げた。それは…『俺が佳奈を笑わせればいい』というもの。田中医師は簡単に言ったが、簡単にできるわけがなかった。そんな中、俺は1つの決意をする。『絶対に佳奈の笑顔を取り戻す』。だから…今日から、俺は佳奈の笑顔を取り戻すために頑張る。

「と、言つても…何すればいいかな」

『佳奈の笑顔を取り戻す』と決意したはいいが…一体、何をすれば佳奈に笑顔が戻るのだろうか。

「そうだ！」

俺に1つの案が思いついた。今度の日曜日、あそこに行って見よう。そう思い、俺は佳奈に誘いのメールを送った。

日曜日。俺と佳奈は、とある公園に来ていた。

「佳奈、ここ覚えてるか？」

「覚えてるも何も…ここって…」

「俺らが出会った場所だよ。確かあれは…」

「2年前の春だね」

俺は佳奈と出会った、この公園に来たら佳奈の笑顔が戻るのではないかと考えていた。そういえば…あの日も日曜日だった。俺は久しぶりにゆっくりできる日だったので、家の周りを散歩しようと思いい、外へ出た。特に何かをする訳でもなく、ただ歩き回った。途中で空を見上げると雲ひとつ無い綺麗な空だったことを覚えてる。そして、そろそろ帰ろうと思っていた時、ふと公園に目を向けると1人の女性が泣いていた。俺は何も考えず、自然とその女性に近づいていった。

「どうかしたんですか？」
「……………」

その女性は俺の問いに何も答えず、ただ泣いていた。俺は、その何とも言えない空気に押しつぶされそうになった。そんな時、風が公園を吹き抜けていった。それと同時に俺らの前に桜の花びらが舞い降りてきた。

「あつ…桜」

俺は自然にそう言っていた。するとそれまで泣いていた女性がこちらを向いて、

「桜の花びらが散ってる…」

と言った。俺は何か嬉しかった。

「やっと喋ってくれた」
「……………」

俺が話しかけると下を向いてしまった。

「ねえ、桜好きなの？」
「……………」
「好き」

俺が桜の話をするとその女性は答えてくれた。

「俺は竹中達也。君は？」
「……………」
「新山佳奈」
「どうして泣いていたの？」

「あなたには関係ないでしょ」

そう佳奈に言われ、俺は困った。確かに関係無い。だから何も言えない。

「でも……」

「いいから私に構わないで！」

「……」

俺は佳奈の変わりようにビックリした。比較のおとなしい人だと思っていた。

「……」

それから俺と佳奈の間に会話は無かった。聞こえるのは元気な子供たちの声だけだった。

第5話 初めて出会った場所（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

佳奈と達也は公園で出会ったんですね。何という偶然…でもケンカ
中。どうなるんだ…

第6話もよろしく願います!!

第6話 想い（前書き）

第6話目です。

よかつたら読んでください！

佳奈と達也は…？

第6話 想い

空も夕焼けに変わり、周りで遊んでいた子供たちも家に帰ったのだろっ、いつの間にかいなくなっていた。公園には俺と佳奈の2人だけになった。相変わらず佳奈は下を向き、時には泣いている。俺自身、何度も自分のことを『バカだな』と思った。けど…何故か佳奈のことを放っておけなかった。そんなことを考えている時、

「あなた、いつまでいるの？」

佳奈が問いかけてきた。

「佳奈さんが話してくれるまで」

この言葉を言った後、俺はまた自分に『バカだな』と言った。

「あなたバカじゃないの？ 何で私なんかにつき合ってるのよ！」

「ああ、俺だってバカだと思ってるよ」

「じゃあ…」

「俺は佳奈さんを放っておけないんだ。何で泣いていたのか、俺は何か力になれないのか」

「見ず知らずのあなたが私の力になれる訳ないでしょ！」

「誰がいつ、そう決めたんだ？ 俺は確かに佳奈さんとは見ず知らずの赤の他人だよ。だけど、こうやって偶然出会った。もしかしたら俺にも何かできるかもしれないだろ？ 言ってみなきゃわからないことだってあるよ」

「……………」

佳奈は黙ってしまった。その時、再び風が公園を吹き抜けていく。

そして、俺らの前に桜の花びらが舞い降りてきた。

「……じゃあ聞いてくれる？」

佳奈が重たい口を開いた。

「もちろん」

「私ね…今日、お姉ちゃんが死んじゃったの。今までお姉ちゃんとケンカばかりしてて、お姉ちゃんのこと嫌いだった。けど…お姉ちゃんが最後に言ったんだ。『佳奈、今までありがとう。絶対に幸せになるんだよ』って」

そこまで言って、佳奈は再び泣いてしまった。

「私…お姉ちゃんに『ありがとう』って言えなかった。最後まで言えなかった…」

「佳奈さん…俺、佳奈さんは何も悪くないと思います」

「でも…でも…」

「むしろ佳奈さんは幸せですよ。素敵なお姉さんがいたんですから。これから佳奈さんが幸せに生きていく。それこそ、お姉さんに感謝を伝える方法じゃないですか。俺はそう思います」

「私…生きていていいの？」

「何言ってるんですか！ 佳奈さんは絶対に死んじゃダメです！ きつと家族もお姉さんも悲しみますし、俺も悲しいですから」

「えっ？」

「あつ…いや、その、そういう意味じゃ…」

「ふふ。達也さんは面白い人ですね」

達也さん…？ 初めて佳奈が俺を呼んでくれた。それに笑ってくれた。俺は自然と、

「俺、佳奈さんを幸せにしたいです」

と言っていた。

「…………… 優しくお願いしますね。お姉ちゃんも喜ぶと思います」

こうして俺と佳奈は付き合うことになった。

「おい、たっちゃん？ たっちゃんってば！」

「あつ…何？」

「もう、何考えてたの？ 何回も呼んだのに…」

「ごめんごめん」

「たっちゃん、ありがとね」

「えっ？」

いきなりのに俺は戸惑った。

「私ね、あの時たっちゃんがいなかったら、私は生きてないと思うんだ。だから、本当にありがと。そして…これからもよろしくお願いします」

この言葉に佳奈の笑顔は全く無い。そこにすごく違和感を感じたが、佳奈にそう言われ、すごく嬉しかった。

「佳奈、こっちこそありがとう」

俺がそう言つとあの日のように風が公園を吹き抜けていった。そして…

「桜だ！」

「うわゝきれい」

「あの日みたいだな」

「うん！」

俺と佳奈は時間を忘れて公園で1日を過ごした。でも…佳奈に笑顔が戻ることは無かった。

第6話 想い（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

何か夢のような話ですね。でも、佳奈に笑顔は戻らなかった…。
一体どうしたら？

第7話も頑張りますので、よろしくお願いします！

第7話 めいぐるみ（前書き）

第7話目です。

達也が佳奈の笑顔を取り戻すために考えた、次の方法は？

最後まで楽しんでもらえたら、嬉しいです。

第7話　ぬいぐるみ

公園でデートをしてから1週間。佳奈に笑顔が戻ることは無かった。

「簡単に考えすぎてたな…」

佳奈との出会いの場所に行つて、その時のことを思い出せばきつと笑ってくれると俺は思っていた。けど…現実には、そんなに甘くなかった。でも、俺は諦めない。諦めてたまるか！絶対に佳奈の笑顔を取り戻すと決めたんだ！

「佳奈の喜ぶこと…」

そう思いながら、考えていると1つ案が思いついた。そして、俺は家を飛び出し、デパートへと向かった。

「いらっしやいませ」

俺が向かった先は、おもちゃ売り場。佳奈は、ぬいぐるみが大好きで、プレゼントすると必ず喜んでくれた。その時の笑顔は、いつ

もよりもまぶしく、輝いている。だから、ぬいぐるみをプレゼントしたら、笑顔を取り戻してくれるのでは、と考えたのだ。まあ、単に佳奈の喜ぶ姿が見たいというのが本心なのだが…

「最近、プレゼントしてなかったし、何か特別かわいいものがないな」

そう思い、ぬいぐるみの売っているコーナーに行こうと思うのだが、今日は日曜日。子供連れのお客さんでごった返していて、なかなか進めない。できれば、あまり遅くならないようにしたいのに…。しかし、気持ちとは裏腹に5分経っても、10分経っても、全くと言っていいほど進めていない。俺は何回も腕時計を確認した。いつの間にか30分が経っていた。レジもかなり混んでいて、見てるだけで嫌になりそうだ。

「うー早く行きたいな…」

今日は佳奈に『家に行く』と伝えてある。だからこそ、手ぶらで行きたくない。プレゼントをすると決めたからには、必ず喜んでくれるプレゼントがしたい。しかし、そんな気持ちを嘲笑うかのような時間が過ぎていく…。それから1時間。ようやく俺は、ぬいぐるみのコーナーにたどり着いた。多分、1時間30分前までいた場所から距離を考えると20メートルもないだろう。

「はあ、やっとだよ」

俺はもう、疲労困憊という感じだった。俺は、もう一度、腕時計を見る。15時30分か…なるべく早く行きたいからな。俺は、ぬいぐるみを見た。くま、うさぎ、ねこ、いぬ…たくさんの種類がある。さすがは大型デパートの中のおもちゃ売り場だ。規模が違う。

「確か佳奈は、特にくまのぬいぐるみが好きだから…」

くまのぬいぐるみを見ると様々なくまのぬいぐるみが置いてあった。寝ているくま、怒ってるくま、泣いてるくま…そして、笑っているくま。俺は最初から1つ決めて、ここに来た。それは、絶対に笑っているぬいぐるみにしよう、と。そこにあった笑っているくまのぬいぐるみは大きさもそこまで大きくなく、理想通りのぬいぐるみだった。俺は、そのぬいぐるみを1つ手にとってレジへと向かった。レジは8つあるのだが、相変わらずどこも長蛇の列だった。それから1時間後の16時30分、会計が終わり、ようやく俺は店から出た。ぬいぐるみ1つを買っただけに2時間30分。こんなに時間がかかるなんて考えもしてなかった。でも、無事くまのぬいぐるみを手に入れた。佳奈が喜んでくれて、笑ってくればいいのだが…。不安と期待を抱きながら、俺は佳奈の家に向かった。

佳奈の家の前に到着すると今までに無いような緊張感に襲われた。

「ふっ落ち着け、俺」

自分にそう言い聞かせながらインターホンを押す。

『はい?』

聞こえてきたのは佳奈の声だ。

「竹中達也です」

『やっと来たよ。今、開けるから待ってて』

佳奈が玄関に歩いてくる足音が聞こえた。そして、鍵を開けてもらい、佳奈の家に入った。

「おじゃまします」

「遅かったね」

「あゝちよつとあつてね。」ごめんごめん

「別にいいけど…」

俺は、いつも通り佳奈に案内され、佳奈の部屋に行く。佳奈の部屋は、いかにも女の子らしい部屋で好きなぬいぐるみが並べられたりしている。俺があげたぬいぐるみもあつて、いつもそれを見ると嬉しくなる。

「佳奈、体調とかは大丈夫?」

「うん。最近は大丈夫だよ」

「よかった。あゝそうそう。佳奈にプレゼントがあるんだ」
「プレゼント?」

俺は今日、買ったぬいぐるみを取りだす。

「はい」

「わゝありがとう」

やっぱり笑顔の無い『ありがとう』は、どうしても不自然に思えてしまう。早く笑顔を取り戻してくれればいいのだが…

「ねえ、たちちゃん」

「ん？ どうした？」

「あのね…」

この後、佳奈からあんなことを言われるなんて思ってもみなかった…。

第7話 めいぐるみ（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！

第8話では新しい人が登場する予定です。第8話も早く更新できるように頑張りますので、よろしくお願いします！

第8話 消えゆく希望（前書き）

第8話目です。

佳奈が達也に言ったことは…？
新キャラも登場します。

第8話 消えゆく希望

プレゼントをあげた時には無かった重苦しい空気が流れる。もしかして、プレゼントがあまり嬉しくなかったとか…でも、さっき『ありがとう』って…俺は、この重苦しい空気の原因が何なのかわからなかった。

「たっちゃん、しばらく私に会いに來ないで欲しいんだ」
「えっ!？」

俺は耳を疑った。会いに來ないで欲しい…? そんな言葉が佳奈の口から出てくるなんて信じられなかった。というか、信じたくなかった。

「私、考えたんだけど、こうやって会っても私は笑えないし、たっちゃんに苦しい思いをさせるから…」

「それは俺じゃあ佳奈の笑顔を取り戻せないって言うのかよ!」
「……………」

佳奈は黙り込んで、下を向いている。初めて会った時に似ている。この状況は俺が一番嫌いだ。

「俺は苦しい思いなんてしてない。佳奈に笑顔が無くたって、佳奈は佳奈だ。俺は、そう思っている。だから…」

「たっちゃん、お願い。私もたっちゃんと会って、お話するのは嬉しいよ。けど…だからこそ、たっちゃんの顔を見ると申し訳なくなるし…何よりも私が苦しくなるんだ。ごめんね、たっちゃん」

ここまで言われてしまったら、俺は受け入れるしかなかった。

「佳奈がそこまで言うなら、わかったよ…じゃあ、帰るわ」

俺は全身から力が抜けた気がした。一言で表すと『終わった』。そんな気持ちだった。俺は佳奈に別れを告げて帰ることにした。いつも言ってくれていた『バイバイ』を佳奈は言ってくれなかった…。

帰り道、俺は佳奈に何か悪いことをしたか考えていた。今日はぬいぐるみをプレゼント、先週は思い出の公園でデート。特に悪いことをしたつもりは無いが、俺の知らないうちに佳奈は傷ついていたのかもしれない…もしそうだとしたら、俺が佳奈に今日のように言われるのは仕方ない。

「はあ〜」

もう何回ため息をついたんだろうか。自然とため息が出る。未だに今日のことが信じられない。何でぬいぐるみをプレゼントしたんだろ…。ぬいぐるみ買うのに2時間30分かかり、せっかく買ったぬいぐるみをプレゼントした佳奈にあんなことを言われ…何て最悪な日なんだ…

「あゝイライラする！」

俺は思い切り、前に転がっていた空き缶を蹴った。空き缶は勢いよく転がっていった。それを見ながら、俺は悲しくなった。空き缶は何かに当たって止まった。

「これ、あなたの？」

空き缶を拾ったのは1人の女の子だ。

「いや、俺のでは無い」

「じゃあ、誰の？」

「そんなのわからん」

「ふゝん。あなた、何かイライラしてるんでしょ？」

「へっ？」

「その顔は凶星だな」

「あなたは一体…？」

「私は田中裕美。たなかひろみあなたは？」

「竹中達也だ」

「ねえ、何であなたがイライラしてるってわかったと思う？」

「さあ？」

「私は人の気持ちがわかるんだよ」

彼女は笑顔でそう言った。

「まさか。大人をからかうのもいい加減にしろ」

「むゝ失礼だな。私は、こう見えても20歳なんだから！」

「ああ…背が小さいから高校生くらいかと思った」

「それを言わない！」

俺は不思議な気持ちだった。こんな偶然出会った裕美さんと話しているだけで何もかも忘れることができる気がした。

「それで何でイライラしてるの？」

「あゝえつと、まあ、いろいろと…」

「辛かったら、わたしが話を聞いてあげるよ？」

そう言われ、俺は自然と今日の話を話していた。全てを裕美さんに話した。

「そつか。人生って何事も上手くいく訳じゃないからねゝそういう日もあるよ」

「まあ、そうだけど…」

「その人は笑えないことにイライラしてるだけだって。きっとあなたのことを嫌いになった訳じゃないと思う」

「ありがとう。何かスッキリしたよ」

「どういたしまして」

「俺、そろそろ行くわ。ほんとありがとう」

「じゃあまたね。また会ったら話しかけてよ」

「ああ」

俺は裕美さんと別れ、家に帰った。

一方その頃…

「ふふ。いい話聞いちゃったなゝ。笑えなくなる病気か…はは。これから面白くなりそう」

裕美は達也から聞いた話を思い出し、あることを企み始めていた…。

第8話 消えゆく希望（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

佳奈と達也の心は一体どうなってしまうのか…そして新キャラ・裕美は？

第9話では、いろんなことが起こる予定です。頑張ります！

第9話 診察結果（前書き）

お久しぶりです。

第9話が完成しました。良かったら読んでください。

佳奈との関係はどうなってしまうのか…？

第9話 診察結果

佳奈に『来ないで欲しい』と言われてから、3日。俺は毎日が楽しくなかった。日曜日は裕美さんに助けてもらったが、それ以降は彼女とすら会わない。何も無いつまらない生活…俺は、どうでもよくなっていた。

「そういえば今日は佳奈の診察の日だな」

毎週、水曜日には必ず病院の診察に行かなければならないことになってる。佳奈に直接は会えないし…

「あとで田中医師のところに行ってみるか…」

診察は午前中に終わってるはず…俺も今日は仕事が早く終わるし、帰りに行ってみよう。

午後3時、俺は仕事を終え、すぐに病院へと向かった。病院に行くくと急患なのか、慌ただしい雰囲気だった。田中医師も走り回っている。

「おい！ 早く持つてこい！」

田中医師がそう叫ぶ。それを聞いて俺は嫌な予感がした。もしかして…佳奈が倒れたとか…？ 俺は急に不安になった。この慌てよう、いつも冷静な田中医師があんなに叫んでいるのだ…きっと命に関わることだろう。それがもし佳奈だったら…どんどん不安になる俺。その時、

「お久しぶり」

肩を叩かれ、そう言われた。振り返るとそこには裕美さんがいた。

「裕美さん…何でここに？」

「あゝこないだ言ってなかったっけ？ 私もここに通ってるんだ」

裕美さんがここに通ってるなんて初めて聞いた。

「何か病気？」

「うつん。私は頭痛の薬をもらいに来ただけ」

俺は裕美さんの話を聞きながら、医師たちの声を聞いていた。何度も田中医師の叫び声が聞こえる。

「ん？ どうしたの？」

「いや、特には…」

「わかった。あなた不安なんですよ」

「えっ？」

「初めて会った時に言ったでしょ。私は人の気持ちがわかるって」

そうだった…裕美さんは何でもお見通しだったんだ…。

「大丈夫。今、慌てているのは近くで交通事故があつて、その人がこの病院に運ばれて来たの。この前言つてた…佳奈さんだっけ？」

「あつ…うん。心配になつちやつてさ…」

「佳奈さんなら大丈夫だよ。午前中に名前呼ばれてたし」

俺は裕美さんから、そう言われて、やっと安心できた。佳奈はちゃんと診察を受けてるみたいだし、良かった。

「ほら、そんな暗い顔をしないの。笑って」

「うん」

それから急患の人の治療が終わるまで、俺と裕美さんは話をしていた。

俺が病院に到着してから2時間。裕美さんと別れた俺は、ようやく田中医師に会うことができた。

「お久しぶりですね」

「はい。それで佳奈の調子は？」

「特に目立って悪いことはありませんが、良くもないです」

「そうですか…」

「まあ、まだあれから数週間しか経ってませんし、これからですよ」
「そうですね」

確かにすぐに笑顔が戻るわけがない。いつまでかかってもいいから、佳奈に笑顔が戻ればいい。

「それにしても…気になったことが1つあるんですが…」

俺の方を見て、田中医師が深刻そうに言う。

「佳奈さん、泣いていたんですよ。それがどうも心に引っかかって…何かありました？」

俺は、その言葉を聞いた瞬間、まるで魔法をかけられたかのように動けなくなった。去年、約束したことがあった。『俺は佳奈を泣かせない』と。去年のあの日から守ってきた約束…それが今日、儚く散った。俺は理由がどうであれ、佳奈を泣かせてしまったのだ。

第9話 診察結果（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

達也は佳奈との約束があったんですね。それにしてもどうして佳奈は泣いていたのか…そのうちわかります。

第10話以降もよろしくお願いします！

第10話 約束（前書き）

第10話です。

達也と佳奈の間にあったことは…？

第10話 約束

去年のある日。いつも通り、俺と佳奈はデートをしていた。

「ねえ、次どこ行く？」

「じゃあ買い物しようか。佳奈も欲しいものあるって言ってただろ？」

「うん。じゃあデパート行こっ」

何も変わらない普通のデート。しかし…デパートで俺と佳奈は思いもよらないことに巻き込まれた。それはデパートを歩き回っていた時だった。

『ドン』

俺は誰かにぶつかった。ぶつかった相手が悪かった。

「おい、兄ちゃん。どこ見て歩いてんだ？」

「すいません」

俺は咄嗟に謝る。これで終われば良かったのだが…

「なあなあ、その姉ちゃん。アンタの彼氏さんが俺にぶつかったんだわ。どうすれば許すか、姉ちゃんならわかるよな？」

俺だけに絡んでいればいいものを、何と佳奈にも絡み始めた。

「佳奈にだけは手を出すな」

「あゝん？ 兄ちゃん。アンタが何か言える立場か？」

そう言われると何も言えなくなってしまふ。俺は何もできない自分自身が一番、許せなかった。

「姉ちゃん、わかったら俺について来い。たつぷりと可愛がってやるから」

男は強引に佳奈の手を引っ張る。

「痛い！ 離してください！」

「やめろ！」

俺は直視できず、ただ叫んだ。

「うるせえ！ お前は黙ってる！」

男は佳奈の手を離し、俺に殴りかかろうとしてきた。俺はチャンスだと思った。

「佳奈！ 俺のことはいいから、早く逃げろ！」

俺がそう言った瞬間、男の拳が俺の顔に直撃した。周りのお客さんたちは俺らを見て見ぬふりをする。

「たっちゃん！」

「いいから逃げろって！」

「ほら、姉ちゃん早く来いって」

男は再び佳奈に近寄っていく。俺は力を振り絞って、

「やめろー!」

俺は男に突進する。男にぶつかる直前のことだった。

「うつ…」

俺は腹の辺りに痛みを感じた。殴られた痛みではない。恐る恐る自分の腹を見た。俺の腹には…果物ナイフが刺さっていた。血が溢れ出してくる。

「キヤー!」

さすがに周りのお客さんが異変に気付いたのか、騒然となっている。俺は立っていることができなくなり、床に倒れこんだ。

「たっちゃん! たっちゃん!」

佳奈が駆け寄ってきて、泣きながら俺の名前を叫ぶ。

「佳奈…ゴメンな。俺…佳奈を幸せにするって言ったのに…」

「たっちゃん、死なないで! 私…私…」

佳奈の目からは涙が止まらない。俺は悲しかった。佳奈の悲しんでいる顔を見たくなかった。

「佳奈…泣くなよ。笑ってくれよ…」

俺は、その言葉と共に気を失った。

気を失った俺は夢を見ていた。目の前には佳奈がいる。

『佳奈？』

俺は何度も佳奈の名前を呼ぶ。しかし、佳奈はこっちを振り返ってくれない。それどころかどんどん離れていく。

『佳奈！』

俺は叫びながら佳奈を追いかける。全速力で走る。だが、佳奈は離れていってしまう。

『何で…何でだよ！ 佳奈！』

「佳奈！」

俺は突然、目が覚めた。一体どのくらい眠っていたのだろうと思うくらい夢が長く感じた。ゆっくり身体を起こし、俺は辺りを見渡す。ここは病院のようだ。そっか…俺、刺されて…。あの忌まわしい記憶が呼び起こされる。

「たっちゃん…」

ベットの横で寝ている佳奈が寝言で俺の名前を呼ぶ。

「佳奈…」

「たっちゃん、死んじゃだよ…」

佳奈は俺が目覚めますまで、ずっと待っていてくれていたのだろう。そして、ずっと泣いていたのだろう、目が腫れている。

「佳奈…ゴメンな。俺はここにいるよ。俺は無事だよ。だから…だから、泣かないでくれ…」

俺は佳奈の顔を直視できなかった。辛くて自分が泣きそうになる。

「たっちゃん…？」

佳奈がゆっくり顔を上げる。

「佳奈、ただいま」

俺がそう言っていると、

「たっちゃん！」

佳奈は泣きながら、俺に抱きついた。

「も…だから、泣くなって」

「だって…だって…」

泣いているため、佳奈は思うように喋れてない。それが何か面白

かった。そして、すごく嬉しかった。

「佳奈、心配かけてゴメンな」

「たっちゃん…無事で良かった」

佳奈がやつと笑ってくれた。そして、俺は思った。何があっても佳奈を泣かせたくない。いや、泣かせない。そう決めた。

「佳奈、俺、約束するよ。絶対に佳奈を泣かせないって」

「ありがとう。たっちゃん、これからもよろしくね」

「こっちこそ、よろしく」

こうして俺は、『佳奈を泣かせない』と約束したのだ。

第10話 約束（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

まあ、とりあえず達也を刺した男は現行犯逮捕されたということでは…。今回は達也と佳奈の過去の話です。第11話では、物語が急展開する予定です。

これからもよろしくお願いします！

第11話 佳奈の行方（前書き）

第11話です。

前にも書いたとおり急展開します。正直、不安でいっぱいです…。

過去の約束を守れなかった達也が次にとった行動は…？

第11話 佳奈の行方

「達也さん…?」

俺は田中医師の声で我に返った。

「あの…もしかして私、聞いちゃいけないことを聞いちゃいました…?」

田中医師が申し訳なさそうに俺の方を見る。

「いえ、そんなことはありません。ただ、少し昔のことを思い出したというか…」

「昔のことですか?」

「はい。昔って言っても去年のことなんですけど、俺、佳奈に約束したんです。『何があっても、佳奈を泣かせない』って。でも…」

「そうだったんですか…」

「俺、佳奈に会ってきました!」

「あつ…ちょ、達也さん?」

俺は、田中医師に頭を下げ、病院を飛び出した。佳奈には『しばらく会いたくない』って言われたけど、今は会いに行かないといけない気がする。そう思って俺は、すぐに佳奈の家へと向かった。

佳奈の家の前に着いた俺は緊張していた。いつもとは違う緊張。苦しさを伴う緊張だ。俺は深く息を吸う。そして、一気に息を吐く。

「よし」

俺は意を決してインターホンを押した。

『ピンポーン』

中から返事はない。おかしい。もし、佳奈がいなくても、佳奈のお母さんがいるはずだ。誰も出てこないのはおかしい。俺は、もう一度、インターホンを押す。

『ピンポーン』

やっぱり返事はない。もしかして本当に誰もいないのか…？ 諦めれず、ドアノブに手をかけてみた。すると、信じられないことにドアが開いている。やっぱりおかしい。俺は恐る恐る中に入る。中に入った俺が見た光景は壮絶な光景だった。

「な…何だよ、これ…？」

物があちらこちらに散らかっており、まるで泥棒に入られたかのような光景だった。その時、俺は奥に倒れている人がいることに気がついた。そこに倒れていたのは佳奈のお母さんだった。

「だ…大丈夫ですか!？」

俺が話しかけると佳奈のお母さんは今にも途切れそうな声で、

「達也くん…佳奈を助けて…」

と言った。

「一体、何があつたんですか？」

「私もわからないの…突然、誰かがやってきて、その数分後に佳奈が急に暴れだして…」

それだけ言つて、佳奈のお母さんは気を失った。俺は、とりあえず救急車を呼んだ。そして、今、起きていることを整理しようと思つた。佳奈のお母さんによると、誰かが佳奈に会いに来たことになる。一体、誰が…？ それから佳奈は急に暴れだした。その数分で佳奈に何があつたんだ…？ わからない。何回、考えても何もわからない。そもそも佳奈はどこにいる？ まだ自分の部屋にいるのか？ 俺は佳奈の部屋に行くことにした。

佳奈の部屋のドアを開けた瞬間、風が通り抜けていった。窓が全開になっている。部屋の中は荒れ果てていた。俺のプレゼントしたぬいぐるみは、あちらこちらに散らかってあった。

「う…そだろ…」

俺は状況が飲み込めなかった。何でこんなことになっているんだ…俺は恐ろしさから、佳奈の家を飛び出した。嫌だ、嫌だ、嫌だ…信じたくない。こんなこと信じたくない。そして、思いっきり佳奈の家から飛び出した俺を待っていたのは…

「あれ？ どうしたの？」

そこにいたのは裕美さんだった。

「あ…裕美さん」

「そんなに慌てて、どうしたの？」

「……………」

あまりに信じられなかった光景だったため、俺は言葉にできなかった。

「あ、そうそう。ちょうど私もあなたに言いたいことがあったの」

そう言って、裕美さんは一瞬ニヤつとして、俺に近づいてくる。

「裕美さん…？」

「達也くん」

達也くん？ 裕美さんって俺の名前、呼んでたっけ？

「あんな笑えない子よりも私の方が幸せになれるよ？」
「なっ…!!」

ほんとに裕美さんなのか疑うほど、いつもの裕美さんでは考えられない言葉が飛び出してきた。

「だから、私の方が幸せだよ？」

「何言ってるんですか…佳奈をバカにしないでください」

「別にバカにはしてないよ？」

裕美さんは、ずっとニヤニヤしている。それが俺をイライラさせた。

「佳奈のこと、裕美さんは何も言わないでください」

俺は『じゃ』と言って裕美さんと別れる。その時だった。

「あゝあ、そんなこと言っちゃって…佳奈さんがどうなってもいいのかな？」

「佳奈のこと知ってるのか？」

別れようと思った俺の足が止まる。

「知ってるも何も…」

そう言って、裕美さんは無線機を取り出した。そこから聞こえたのは…

『もうやめて！ お願いだから！ やめてください！』

佳奈の悲痛な叫び声だった。

「佳奈！ 佳奈に何をした！」

「今ね、実験をしてるんだよ。佳奈さんでね……」

裕美さん……いや、裕美はニヤつとして言った。

「佳奈で実験だつて……？」

「そう。私は人の気持ちができる。そして、人の気持ちを操作したくなった。そこで考えた。人の脳に何か刺激を与えれば気持ちを自由に変えられるんじゃないかって。佳奈さんは、あなたの話を聞いている感じだと感情に起伏がある人。実験に持ってこいだったのよ」

なんて人だ……恐ろしすぎる。

「佳奈は無事なのか？」

「ええ。私は佳奈さんを殺そうとは思ってない。あくまで実験」

「佳奈はどこにいる？」

「知りたい？」

裕美は俺を挑発する。

「教えてくれ」

「じゃあ、私についてきなさい。佳奈さんのところまで案内するわ」

そう言つて俺は裕美に案内されながら、佳奈のいる場所に向かった。

第11話 佳奈の行方（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ついに裕美の正体が…一体、佳奈はどうなっているんでしょうか？
そして達也の運命は…？

第12話もよろしく願います！

第12話 実験（前書き）

第12話です。

はたして裕美が考えていることは…？　そして佳奈は？　達也の運命は？

様々な気持ちと思惑が交差する第12話です。

第12話 実験

裕美に案内されて30分。とある病院に到着した。

「ここは？」

「私が実験用に作った建物よ」

俺は裕美に案内されながら、中に入る。中は薄暗く、恐怖を感じるほどだ。奥に行けば行くほど不気味な雰囲気になる。

「佳奈は、どこにいるんだ？」

「慌てないで。もう少ししたら、いるよ。泣き喚いた姿でね」

俺は怒りを必死に抑える。ここで俺が怒ったら、佳奈には会えないし、佳奈に何が起こるかわからない。そんなことを考えている内にある部屋の前に到着した。

「ここに佳奈さんはいるわ」

「じゃあ、早速…」

「ちよつと待って！ 1つだけ約束して」

「約束？」

「ここまで来て、約束だって…？」

「そう。絶対に実験を邪魔しないこと。いい？」

「佳奈は無事に帰してくれるんだな？」

「ええ。もちろん」

裕美のその言葉で俺はホツとした。そして恐る恐る中へ…

「佳奈！」

実験している場所と俺らがいる場所はガラス1枚で仕切られている。だが、俺の声が聞こえたのか佳奈がこっちをちらっと見た。佳奈は、かなり辛そうだった。

「たっ…ちゃん…助けて…」

佳奈が何か言っているのだが、俺のところには届かない。

「達也くん、どう？」

「どうって…こんなこと…」

俺は怒りを通り越していた。何も言えない…。

「じゃあ、そろそろ良い物を見せてあげるよ」

裕美は、そう言い、横にあったスイッチを押す。佳奈の表情が一変する。

「いや！ もうやめて！ いやあああ！！」

佳奈の悲鳴がガラス越しに伝わる。見るに見れなかった。

「もうやめろ！ やめてくれ！」

「達也くん、言ったよね。実験は邪魔しないでっ」

佳奈の悲鳴が嫌でも耳に届く。まるで佳奈も俺も拷問を受けているかのようだ。そんな俺らを見て、裕美は笑っている。この人は悪

魔だ。

「何で佳奈なんですか！ 俺らに何か恨みでもあるんですか！」

「うっん。恨みなんて無いよ」

じゃあ何で俺らなんだ…俺がそんなことを思っていると、

「佳奈さんは笑顔を失った。それが好都合なのよ」

佳奈が笑わないことが好都合だって！？ どういうことだ？

「人間には様々な感情がある。けど、その中の1つを失えば全ての感情のバランスが崩れる。ただでさえ、感情の起伏が激しい佳奈さんは、もっと起伏が激しくなる。だからデータが取りやすいんだよほら、佳奈さんを見てみなよ」

俺は裕美にそう言われ、佳奈を見る。佳奈は放心状態だった。

「何か変化があるのか…？」

俺がそう言った時だった。

『バン！』

急に大きな音が響いた。佳奈を見ると、両手で実験台を叩いている。その手からは血が出るほどだ。

「や…やめろ！ 佳奈！」

俺には、そう叫ぶしか出来なかった。

「早く佳奈を元に戻せよ！」

「はいはい。データも取れたし、戻しますよ」

裕美は、さつきと違うスイッチを押した。すると、だんだん佳奈の身体が落ち着いていく。

「もういいだろ…早く佳奈を解放してくれよ…」

「うゝん、そうだな…。まあ、そろそろいつか」

やっと佳奈が解放される。俺と佳奈を仕切っていたガラスが外される。

「佳奈！ 大丈夫か！」

俺が呼びかけると佳奈は静かに頷いた。そして俺は裕美を睨みつける。

「アンタがやったことは絶対に許さない。俺と佳奈はアンタを許さない」

俺は佳奈を抱きかかえて、建物から出た。裕美は最後まで俺らを嘲笑っていた。

「またね。達也くん、佳奈さん」

佳奈を抱えながら俺が向かった場所は自分の家。佳奈の家は大荒れ状態なので自分の家に寝かせようと思った。佳奈は俺と会ってから、すぐに眠ってしまった。何時間あの機械でいじめられていたのだろう。考えただけでも胸が痛くなる。俺は自分を責めていた。俺が裕美に佳奈のことを言わなければ…こんなことにはならなかった。俺が…俺がもつとしっかりしていれば…。

「たっちゃん」

佳奈が俺を見て、名前を呼ぶ。

「佳奈…」

「ゴメンね…」

佳奈は急に謝った。俺の目から涙が溢れる。

「何で佳奈が謝ってんだよ…何も悪くないのに、何で謝ってんだよ…」
「うっん。私、たっちゃんをたくさん傷つけた。あんな酷いことも言って…だから…」

佳奈を見ると佳奈の目からも涙が溢れていた。

「何言ってるんだよ…悪いのは俺の方だ。いっつも佳奈に迷惑ばかり

かけて…」

そう。いつも俺が佳奈に迷惑をかけていた。去年のデパートのこ
とだって、元は俺が悪かった。俺は佳奈に何度も助けられた。今回
だって…

「私ね…今、夢を見てたんだ。目の前にたっちゃんがいるの。私が
何度、呼びかけても振り向いてくれなくて…。たっちゃんは、どん
どん離れていくんだ。私は泣きながら、たっちゃんを追いかけた。
でも、どんどん離れちゃって…。そこで夢は終わったの」

あの日、俺が見た夢と同じ内容だ。

「佳奈、俺は佳奈から離れたりしないよ。絶対に」

「たっちゃん…ほんとにゴメンね」

「もういいから。そんな顔するなよ」

俺がそう言っていると佳奈は一旦、下を向いてから…

「あれ？」

俺は驚きを隠せなかった。一瞬だが佳奈が笑ったのだ。まだぎこ
ちない笑顔。でも、俺は嬉しかった。

「佳奈、今…」

「ん？ どうしたの？」

「いや、何でもない」

俺は佳奈に確認しようかと思ったが、言つのをやめた。それでも
俺は、確実に前に進めると確信を持つことができた。

第12話 実験（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

裕美は恐ろしい人ですね…書いている僕自身が怖くなりました。実際にあったら…そんなことを考えてると寒気がします。そんな中、佳奈に笑顔が…？

第13話もよろしく願います！

第13話 再出発（前書き）

第13話目です。

笑顔が少し戻った佳奈。このまま佳奈に笑顔は戻るのか？ そんな中、達也の気持ちとは…？

第13話 再出発

次の日、佳奈に体調の変化は特になく、元気になっていた。ただ、少し心配だったので、俺は仕事を休み、佳奈を病院に連れていった。

「もうたっちゃんったら、心配性なんだから。私は大丈夫だって」「もしも何かあったら大変だろ。一応だよ」

佳奈に万が一のことがあったら大変だ。それに俺は病院に行つて、田中医師と話がしたかった。昨日の佳奈の変化は話しておくべきだろう。病院に着いた俺と佳奈は待合室で話をしていた。

「たっちゃん、仕事大丈夫なの？」

「うん。休み取れたんだ」

正直、休みは取れないと思っていた。だが、上司の機嫌が良く休みが取れたのだ。運が良かった。そんなたわいも無い話をしていると、

「新山佳奈さん、どうぞ」

「はい」

佳奈が名前を呼ばれ、俺と佳奈は田中医師の待つ診察室へと入った。

「佳奈さん、それに達也さんまで…どうしたんですか？」

「実は…」

俺は昨日あったことを田中医師に全て話した。

「そんな…佳奈さん、大丈夫でしたか？」

「はい。でも…今でも思い出すと怖いです」

そんな佳奈の言葉を聞いて、俺は胸が苦しくなった。佳奈が悲しむことになってしまふ。そう思いながら佳奈の顔を見た。ちゃんと田中医師の言葉に反応してるし、大丈夫そうだ。『佳奈は強いな』そう俺は思った。

「じゃあ、一通り検査しますね。達也さん、少し待っててもらいますか？」

「あ、はい」

佳奈は俺に『いつてくるね』と言って、検査シートをもらって、各種検査に向かった。俺は田中医師に昨日のことを話そうと思った。

「あの…少し話があるんですが、いいですか？」

「話…ですか？ いいですよ。どうかしました？」

「昨日、佳奈が笑いました」

そう言っていると田中医師は机を叩き、立ちあがって

「本当ですか！」

と言った。あまりの迫力に俺は少し何も言えなくなった。

「あ、すいません。興奮しちゃって」

「いえ。笑ったと言っても、一瞬です。かなりぎこちなかったですし…」

「それでも、良くなっている証拠ですよ」

田中医師の言つとおり、確実に佳奈は良くなっている。

「達也さん、この調子で行けば、必ず佳奈さんに笑顔が戻りますよ」
「そうですね。俺、頑張ります」

俺は佳奈が戻ってくるまで、田中医師と話していた。

「問題はなさそうですね」

田中医師から、そう告げられ、俺も佳奈もホッとした。何かあったら、どうしようとずっと心配だった。田中医師は、それぞれの検査の説明を詳しくしてくれた。

「また来週の水曜日に来てください」

こうして田中医師の診察は終わった。

「佳奈、良かったな」

「だから言っただしょ。大丈夫だった」

「まあ、何ともなかったから良かったよ」

「そうだね。たっちゃん、ありがとう。大好き！」

そう言って佳奈は俺の手を握る。俺は途端に緊張した。何だろう、この感じ…？ いつもとは違う。

「たっちゃん？」

佳奈が俺の顔を覗き込む。俺は恥ずかしくて顔を背ける。

「あゝたっちゃん、恥ずかしがつてる」

「そ…そんな訳ないでしょ」

ヤバい、恥ずかしくて死にそうだ…。

「たっちゃん、今日もたっちゃんの家に行っていていい？」

「もちろん。佳奈を1人にさせれないよ。落ち着くまでは俺のところにいろよ」

「うん」

佳奈は自分の家に帰っても散らかりっぱなしだし、佳奈のお母さんはケガをして入院中。佳奈は家で1人になってしまう。こんな状況で佳奈を1人にさせることなんてできない。俺は佳奈を連れて、自分の家に向かった。

「おじゃまします」

俺の家に着いて、佳奈はそう言う。俺は考え事をしていた。前進しているという確信を持たとは言え、佳奈の気持ちは、本当に変化したのだろうか？ 佳奈は昨日、笑った。その時、どう思ったんだろうか？ 本当に俺は佳奈の笑顔を取り戻すのに前進しているの

だろうか？

「たっちゃん？」

不安そうな顔をして、俺を見る佳奈。俺は、そんな佳奈を見て、考え事が全て吹き飛んでいった。

「俺、バカだな……」

思わず自分の気持ちが声に出た。俺、何を気にしてるんだろ……。ほんとバカだ。

「たっちゃんはバカだよ」

「……………」

「いつもいつも私のことばかり気にして……本当のバカだよ。最初に出会った時は見ず知らずなのに私が話すまで待って、去年は私をかばってケガして、今は私が笑えないのを気にして……ほんとバカだよ」
「……………」

俺は何も言えなかった。それは自分自身が弱いと俺自身が思っているからだ。いつも俺は辛いことがあるれば佳奈に助けてもらった。いくつも佳奈に助けてもらった。だから、俺は……

「佳奈」

そう言っ、佳奈を抱きしめる。

「えっ？ たっちゃん？」

困惑している佳奈。

「俺、強くなるよ。佳奈がいつでも笑ってくれるように強くなるよ」
「たっちゃん、1人じゃないからね。私もついてるから」

それから俺は佳奈と長い夜を過ごした。最近あつた全てを忘れることができる気がした。

第13話 再出発（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

達也と佳奈、佳奈の笑顔を取り戻すために再出発した2人。はたしてこの先に待つ試練とは…？ 第14話では、再びあの人が…？

これからもよろしく願います！

第14話 どこまでも（前書き）

第14話目です。

佳奈の笑顔のために再出発した2人。仲直りした2人に待っていることは…？

第14話 どこまでも

『ジリリリリ…』

「うゝん」

朝6時。俺は重い身体を起こし、目覚まし時計を止める。今日は普通に仕事だ。

「あれ？ 佳奈？」

横を見ると一緒に寝ていたはずの佳奈がない。どこに行ったんだろ？ そんな風に思っていると、

「たっちゃん、起きた？ 朝ごはん出来たよ」

「あ、うん。今行く」

俺は急いで着替えを済まし、佳奈の元へと向かう。

「はい。いっぱい朝ごはん食べて、仕事頑張ってね」

「佳奈…ありがとう」

佳奈は、わざわざ朝早く起きて朝ごはんを作ってくれていた。さら…

「あと、これ。お弁当作ったの」

「うわゝ嬉しい！ ありがとう！」

朝からこんなに嬉しいことがあるなんて…

「じゃあ、いつてくるね」

「うん。いつてらっしゃい。頑張ってね」

「佳奈、何かあったら、すぐにメールな」

「うん」

俺は佳奈にそう言って、会社へと向かった。

「おはようございます!」

会社に着いた俺は挨拶をして、自分の席へと向かう。今日も1日、頑張るぞ!

「みんな聞いてくれ」

俺が仕事を始めて5分。上司が何かを話し始めた。俺は、ゆっくり上司の方を見る。そして、言葉を失った。

「今日から、ウチに新しい社員が加わる。じゃ、自己紹介して」

嫌だ。聞きたくない。背中に冷や汗が流れる。

「田中裕美です。みなさん、これからよろしくお願いします」

こんな夢だ。現実なんかじゃない。そう俺は自分に言い聞かせる。

「じゃあ、竹中！ お前の横、空いてるな。そこ座って」
「はい」

嘘だろ！？ よりによって何で俺の横なんだ…やめろ！ やめてくれ！

「お願いします」

裕美は俺の横に来る間、一人一人に丁寧に挨拶をしている。そして、俺の前で立ち止まり…ニヤツと笑った。

「よろしくね。達也くん」

俺の横に座った裕美がそう言う。俺は振り向かない。というか振り向けない。

「達也くん、逃げられないよ」

俺の耳に残虐な言葉が告げられる。こんな…こんなことがあつていいのか…俺は朝の喜びから一転、地獄に落とされた気分だった。

「そうそう。竹中、田中さんは新入社員だ。いろいろ教えてやってくれ」

上司からも残虐な言葉が届く。この人もつるんじゃないか

と思うくらいだ。

「は…はい」

俺は返事したが、目も合わせたくないの、裕美を無視した。

「達也くん、今日、仕事が終わったら残って」

俺は無視し続ける。

「佳奈さんにまた酷いことしてもいいのかな？」

「佳奈に何かしてるんですか！」

思わず大きな声を上げる。他の社員が一斉に俺を見る。

「すいません」

「だから、残って」

「何が狙いですか？」

「達也くんと話がしたいの」

俺に話？ 話なら、あの日にたくさんしたはずだ。だけど、俺が裕美の言うことを聞かないと佳奈が…

「わかりました」

俺は渋々、残ることにした。本当は話なんかしたくない。顔すら見たくない。

仕事が終わりに、みんなが帰った。会社内には俺と裕美しかない。

「話って何ですか？」

佳奈のこともあったので、早く話を済ませて帰りたかった。

「まあまあ。佳奈さんのことも心配だろうし、そんなに長く話すつもりはないよ」

俺はマイペースに喋る裕美に苛立ちを隠せなかった。

「早くしてください！」

俺はつい怒鳴ってしまった。裕美は相変わらず笑ってる。

「はいはい。話というか忠告かな？」

忠告？ 何があるって言うんだ…？

「まず、私から逃げれると考えないで」

裕美は恐ろしいことをさらっと言っ。

「俺も佳奈も、もうアンタには関わらない」

「そんなこと言っているの？」

裕美は、そう言つとスイッチを取り出した。

「まさか、それは…？」

俺は恐る恐る裕美に聞く。あのスイッチは佳奈に何か影響を及ぼすのか…？

「ふふ。このスイッチを押すと、ここにある監視カメラの映像を達也くん家に映し出せるの。佳奈さんは達也くん家にいるんですよ？」

「……………」

くっ… やっぱりバレてたか…。

「佳奈さんが私と達也くんが一緒にいるのを見たら、どう思うでしょうかね？」

裕美は悪魔の笑顔で俺を見る。そんなことされたら、大変なことになる。

「忠告はそれだけ？」

そう言つて、俺は帰る準備をする。

「そうね… もう1つ。あなたの身近な人も私の味方かもよ」

今度は冷淡な笑みを浮かべ、俺を見る。俺の身近な人…？

「アンタ、一体何がしたいんだ…？」
「さあ？」

俺は裕美の方を見ずに会社から出た。帰り道、気になったのは裕美が言った『あなたの身近な人も私の味方かもよ』という言葉。俺には全く理解できなかった。

第14話 どこまでも（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ついに達也の会社内にも裕美が…この人は本当に恐ろしい人だ…。
一体、裕美は何がやりたいんだ？

第15話では、1つ鍵となることがわかります。

第15話 カセットテープ（前書き）

第15話です！

裕美に言われたことを気にしながら、帰宅する達也。家に帰ると…？
ちよつと短いですが、お願いします！

第15話 カセットテープ

「ただいまー」

いろいろあつた1日を終え、自分の家に着く。

「おかえり。お疲れ様」

玄関に佳奈がやってくる。俺は、やっと安心することができた。

「佳奈、大丈夫だったか？」

「うん。何もなかったよ。あ、そうそう。小包が届いてたよ」

小包…？ 誰だろう？ 俺は佳奈から小包を受け取り、中を見る。そこには1本のカセットテープが入っていた。

「何だこれ？」

「聞いてみる？」

佳奈にそう言われ、俺はカセットテープをセットして、再生ボタンを押した。

『佳奈さんって笑えないんだってね』

そこから聞こえてきた声は聞きたくもない裕美の声だ。俺は停止ボタンを押そうとした。その時、信じられない声が聞こえた。

『ああ。俺も経験のない病気だよ。言つとくが、佳奈さんに手を出すなよ』

「嘘…でしょ？」

佳奈は相当なショックを受けている。それもそのはず、聞こえてきたのは…田中医師の声だった。

「佳奈…」

「たっちゃん、怖い」

「佳奈…大丈夫。俺が守ってやる。絶対に守るから」

小刻みに震えている佳奈の身体を優しく抱きしめる。テープは再生され続ける。

『お父さんがそんなことを言える立場なのかな』

『あの子たちだけには手を出すな』

田中医師の声に力が入る。田中医師は俺らを守ってくれようとしている。そんなことを考えていると涙が出そうだった。

『お父さんが何を言っても無駄。私は計画を実行するから』

さつきから裕美は田中医師のことを『お父さん』と呼んでいる。俺は1つ気がついた。裕美の苗字は田中だ。もしかして今日の裕美の言葉は…『あなたの身近な人も私の味方かもよ』という言葉の意味は…

「たっちゃん、どうかしたの？」

佳奈が俺を見てる。会社に裕美が来たとは言えないし…

「うっん。何でもない」

俺には、そう言うしかなかった。

『俺は反対だからな。あんな機械、バカバカしい』

きつと2人が言ってることは、裕美が佳奈にやったことだろう。まさか田中医師も知っていたとは…あんな反応しといて、実は知っていたなんて…そう思うと今度は田中医師に怒りが込み上げてきた。

「佳奈」

俺は自然と佳奈の名前を呼んでいた。

「何？」

「明日、病院に行こう。そして真実を教えてもらうんだ」

「うん… たっちゃんが一緒なら大丈夫」

佳奈は少し不安そうだったが、病院に行くことを決意してくれた。俺と佳奈は明日、田中医師に話を聞くことにした。

第15話 カセットテープ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

まさか田中医師が関わってるとは…裕美と田中医師の過去には何があるというのか？

第16話では、だんだんとわかってきます。
よろしく願います！

第16話 田中医師と裕美（前書き）

第16話です。

カセットテープを聞いた達也と佳奈は病院へ。はたして田中医師と裕美の関係は？ 真実とは？

第16話 田中医師と裕美

「佳奈、大丈夫か？ 無理しないでいいんだぞ？」

「うん…怖いけど、大丈夫」

俺と佳奈は病院にやってきた。目的は1つ…田中医師に話を聞く。この日、田中医師は午前中で診察が終わる。なので、すべての診察が終わったら、田中医師に話を聞こうと思う。俺も佳奈もいつも以上に緊張していた。

「新山佳奈さん、竹中達也さん、どうぞ」

午前中の診察が終わり、俺と佳奈が呼ばれる。診察室に入った俺と佳奈を田中医師は不思議そうに見る。

「佳奈さん、達也さん、どうかしたんですか？」

田中医師は、いつも通り診察シートを見ながら、そう言う。

「今日は話があつて来ました」

「話ですか？ 何かありました？」

俺は佳奈と目を合わせる。佳奈は静かに頷いた。

「先生は田中裕美という方を知っていますか？」

『カチャン』

俺がそう言うと田中医師は持っていたボールペンを落とした。

「どうかしましたか？」

「い…いえ、何も…」

田中医師は、そう言ったが、反応からしても裕美のことは知っているに違いない。

「先生、私、真実が知りたいんです。先生と裕美さんがどういう関係なのか、何で裕美さんはあんなことをするのか…私、知りたいんです」

「……………」

田中医師は黙ったしまった。

「先生、俺たちは真実が知りたい。そのためには先生の話が必要なんです」

「……………君たちは何で裕美と俺の関係を知ったんだ」

田中医師が重たい口を開く。

「昨日、私たちのところにカセットテープが送られてきました」

佳奈は、そう言ってカセットテープを再生させた。

「…これは？」

田中医師は驚いたようだった。裕美と田中医師の会話が収録されているテープなのだから、驚くのも無理はないだろう。

「このテープに入ってる声は先生と裕美さんの声ですよね？」

「……なぜ、このテープが…？」

「先生、お願いします。真実を話してください」
「……君たちには本当に申し訳ないと思ってる。私は田中裕美の父だ」

やはりテープどおり田中医師は裕美の父だった。

「裕美が迷惑をかけて申し訳ない」

「なぜ、裕美は俺らを狙うんですか？」

「それは…」

田中医師が再び黙ってしまう。その時、診察室のドアが開いた。

「裕美…」

そこには裕美が立っていた。

「私が全て教えてあげるよ。あれは私が小学5年生の時だった」

「やめろ！ 裕美、それ以上は…」

「お父さんは黙ってて！」

「裕美…」

田中医師は俯く。一体、何があるって言うんだ…？

「私が人の気持ちがわかるようになったのは小学5年生の時だった。私がやったように、5年生だった私は実験台にされた」

裕美が実験されていた？ どういうことだ？

「人間は気持ちや感情を持っている。私は人の感情がわかるように脳を操られた。この人に」

裕美は田中医師を指差す。それに対して、田中医師は何も言えない。

「でも、それがどうしたって言うんだ？ 感情がわかることって良いことじゃないのか？」

「達也くん、何を言ってるのよ。感情がわかるということは苦痛なのよ。相手の触れてほしくないところまで私は勝手に触れてしまう。感情は人に知られないからこそ、感情なのよ。人に知られるとそれは感情じゃなくなる。私の前では感情を持てる人なんていない。みんなの感情が私はわかってしまうから」

診察室に重たい雰囲気の流れる。

「大人になった私は思った。感情がわかってしまうなら、私の思うように相手の感情を操ればいい。私が味わった苦しみよりも苦しいことをみんなにしようってね。そこで私は、この人に相談した。でも、この人は私の依頼を断った。私にあんなことをしといて、断った。それから私は自分で研究を重ね、あの機械を完成させた」

「それを佳奈に使ったと」

「ええ。達也くんから話を聞いた後、この人から佳奈さんのことを聞いた。私が送ったカセットテープに入ってたでしょ？」

やっぱりあのテープは裕美か…

「人間は喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、苦しみ…様々な感情がある。その中で1つ欠けてしまった佳奈さんは笑顔に繋がる、いくつもの感情を失った。より他の感情に依存しやすい。だからこそ、感情を操りやすい。達也くん、見たでしょ？ 佳奈さんの感情の変化を」

確かに俺は見た。感情の変わる佳奈を間近で見た。その変化は俺にとって苦しく、悲しかった。

「大切な人の感情が変われば、その人に関わってる人の感情も変化する。達也くんも変わったはず」

「……………」

俺は何も言えなかった。

「人間は、ちょっとした事で感情が変わる生き物。私は感情を読むことができる。そして…感情を操ることができる」

裕美は冷淡にそう言い、俺と佳奈を見た。

「あーあ、佳奈さんも可哀想だよねー」

俺は、この言葉に怒りが限界を突破した。

「ふざけんなよ…」

「ん？ 何か言った？」

ニコニコして俺を見る裕美。

「何が感情を操れるだよ…アンタのやってることは、ただの拷問だ。アンタ、言ったよな…感情が他の人にわかったら、それは感情じゃなくなるって。じゃあ、操られた感情だって人の感情じゃないだろ！」

俺は大声で怒鳴った。今までにない感情だった。佳奈は俺に少し怯え、田中医師は何が起こってるのかわからないという感じだった。

「達也くん、私にとって感情はどうでもいいの。私は私以上の感情の苦しみを他の人に思い知らせたいだけ」

「そんなんで俺の佳奈を使うな。今度、俺の佳奈に手を出したら…俺はアンタの感情を無くす」

「どうやって？ やれるもんならやってみてよ」

「……………」

俺は何も言えなくなってしまった。案が何も思い浮かばない。

「所詮そんなものだよ。人間は。感情任せに言う。後のことなんて何も考えてない。そんなことなら感情なんていらない」

確かに裕美の言うとおりだった。俺の今の言葉は感情任せに言ったようなものだ。

「じゃあ私はこれで」

そう言っつて裕美は診察室を出る。俺にはもう、何も言えなかった…。

第16話 田中医師と裕美（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

田中医師と裕美は親と子の関係でした。そして裕美は感情がわかるように実験されていた…。キツイ言葉に何も言えなかった達也はどうする？

第17話もよろしくお願いします！

第17話 佳奈の気持ちと俺の気持ち（前書き）

第17話目です！

裕美に圧倒されてしまった達也。これからどうすれば…？
達也と佳奈は一体、どうなる？

第17話 佳奈の気持ちと俺の気持ち

俺と佳奈は病院から出た。裕美が診察室から出た後、『今は1人にしてくれ』と田中医師に言われた。

「……………」

俺も佳奈も何も話さなかった。気まずい雰囲気が出る。この雰囲気には耐えられなくなったのは俺の方だった。

「佳奈、ゴメンな」

俺は自然と謝っていた。結局、真実を知るところか、佳奈を悲しませてしまっただけになってしまった。

「何で謝るの？」

佳奈は理解できないというように俺の顔を見る。

「だって…また佳奈に迷惑かけたし、悲しませちゃったし…」

「私、たっちゃんのこと悪いって言った？」

佳奈は、そう言って遠くを見る。

「私ね…嬉しいっていう感情は、あまりわからないけど、今日は嬉しいって思ったよ。たっちゃんが裕美さんから私を必死に守ってくれたんだもん。嬉しいよ」

「佳奈…」

「だからね、たっちゃんが謝ることなんて何もないんだよ。たっち

やんがいてくれるだけで私は幸せ。たとえ感情が欠けていたって…」

俺は静かに佳奈を抱きしめる。

「佳奈、辛いだろ…辛いなら言ってくれよ…」

俺には感情を読む力なんて無い。けど…佳奈の気持ちが痛いほどわかる。

「たっちゃん…辛いよ。辛いけど…負けたくないよ…」

「俺もだ。絶対に負けたくない。佳奈、1人じゃないんだぞ？俺がいるから」

きっと佳奈は何も言わないが、いっぱい悩んでいるだろう。だからこそ、何とかしてあげたい。

「ありがとう。たっちゃんは優しいね」

俺と佳奈は家に着くと疲れから眠ってしまった。

それからどのくらい眠っただろうか。俺が起きると辺りは真っ暗になっていた。俺は携帯で時間を確認する。午後8時だった。俺は佳奈を起こさないように部屋の電気は点けなかった。

『所詮そんなものだよ。人間は。感情任せに言う。後のことなんて何も考えてない。そんなことなら感情なんていらない』

今日の午前中の裕美の言葉を思い出す。俺は裕美に圧倒された。悔しかった。でも、裕美の言ってることもわからなくはない。

「どーすりゃいいんだよ…」

俺の中で1つの言葉が思い浮かぶ…『諦め』。これを受け入れるということは佳奈の笑顔は一生、戻ってこない。そして、裕美の言ったことを受け入れることになる。そんなことを俺が考えていると…

『たっちゃん』

突然、佳奈から名前を呼ばれ、俺はドキッとした。

「佳奈？」

振り向くと佳奈は寝ている。どうやら寝言のようだ。

『たっちゃんは私のこと、どう思ってるの？』

一体、佳奈はどんな夢を見ているのだろうか？俺とケンカでもしてるのか？

『私に笑顔が無いから、私のこと嫌い?』

『そんなことない』そう心の中で告げる。

『じゃあ何でそんなに不安な顔をするの? 私が笑えないからでしょ?』

まるで今の自分のことを言われてるみたいで苦しかった。

『たちちゃん、私は笑顔なんて戻らなくてもいい。たちちゃんがそばにいてくれて、笑ってくればそれでいいの』

夢の中とは言え、佳奈の気持ちを聞いている気がした。いや、これが佳奈の気持ちだろう。

「佳奈、ゴメンな。俺、こんなじゃダメだよな……」

さつき『諦める』なんて思ってしまった自分を責めた。佳奈は自分が笑えないのに俺が笑ってくれることを願ってる。俺だって、佳奈が笑ってくれることを願わなければいけないのに……それなのに俺は……

『プルルルル……』

俺がそんなことを考えていると突然、電話が鳴った。俺は受話器を取る。

「もしもし?」

「こんばんは」

俺は、すぐに受話器を置いた。電話を切った。

「もう…いい加減にしてくれよ…」

電話の主は裕美だった。一体、俺たちに何の恨みがあるんだよ…。

『プルルルル…』

電話は再び鳴り出す。俺は耳を塞いだ。怖い怖い怖い…しばらくすると俺が出ないとわかったのか、電話は鳴り止んだ。俺は明日のことを考えていた。会社には裕美がいる。でも、佳奈には言えない。俺は不安と悩みで眠れなかった…。

第17話 佳奈の気持ちと俺の気持ち（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

佳奈の本当の気持ちを聞いた達也。しかし、どこまでもやってくる裕美。精神が壊れそうな状況で達也は耐えられるのか？

第18話もよろしく願います！

第18話 決意と予感（前書き）

第18話目です！

達也は精神崩壊寸前…達也に救いの手はあるのか…？

第18話 決意と予感

「たっちゃんーそろそろ起きないと会社に遅れるよー」

翌朝、俺は佳奈に起こしてもらった。あれから何時間も眠れなかった。だが、いつの間にか寝てしまっていた。俺は寝不足と不安で身体が重たく感じた。今まで嫌な仕事でも会社に行きたくないとは思わなかったが…今日は行きたくない。

「おはよー」

1階へ降りると佳奈が朝ごはんを作っていた。

「佳奈、毎日悪いな」

「ううん。全然、大丈夫だよ。たっちゃんは気にしないの」

「ありがとう」

この状況を他の人が見たら、普通の生活だと思うだろう。きっと佳奈も普通の1日だと感じてると思う。けど…俺にしたら、普通の1日ではなかった。そんなことを考えてるうちに朝ごはんができた。

「いただきますーす」

「いただきます…」

朝ごはんを食べる気にもならなかった。この料理を作ったのが佳奈でなければ食べていないだろう。

「たっちゃん」

俺は急に名前を呼ばれた。少しビツクリした。

「何？」

恐る恐る聞く俺。今の俺にとって、何もかもが怖かった。

「たっちゃんさー、私に何か隠してるでしょ？」

俺はドキツとした。佳奈に心配をかけたくない。

「べ…別に…」

しかし俺の言葉は逆効果だった。

「嘘！ また、たっちゃんは1人でどうにかしようとしてる。たっちゃんは優しいから、私に心配かけたくないって思ってるだろうけど…私にとったら、そのことが心配」

佳奈は何もかもお見通しだった。俺は胸が苦しくなった。何も言えない俺に佳奈は、

「たっちゃん、言ってくれたよね。『1人じゃない』って。今のたっちゃんは1人になってるよ？ 私もいるんだよ？」

佳奈は泣き出しそうだ。俺は自分自身を責めた。また、佳奈を泣かせてしまう…俺は、どうしていつもこうなんだ…。

「佳奈、ありがとう。おかげで目が覚めたよ」

「たっちゃん、約束して。ずっと2人で一緒だって」

「うん。約束するよ」

そして俺は今の状況を佳奈に全て伝えた。佳奈は心配してくれたが、俺に心配をかけないようにか『私のことは大丈夫だから、頑張っ』と言ってくれた。俺は気合を入れた。裕美に負けてられるか！俺は絶対に佳奈の笑顔を取り戻す！そして、裕美の感情への考えを変えて見せる！

「じゃあ行ってくるわ」

「うん。気をつけて。頑張ってね！」

俺は佳奈に見送られ、会社へと向かった。

会社へ向かう途中、待ち伏せしてたのか裕美がやってきた。俺は無視して通り過ぎようとした。

「おはよう。 たっちゃん」

裕美は信じられないことに俺を『たっちゃん』と呼んだ。

「その呼び方やめろ。その呼び方をしているのは佳奈だけだ」

「あらあら。それは残念だなあ」

朝から裕美のニヤニヤした顔を見るとすごく腹が立つ。何でいつもニヤニヤしてるんだ…

「それで、何か用ですか？ 会社に遅刻したくないんですけど」

「用ね…病院に行った方がいいわよ」

その言葉を俺は理解ができなかった。

「それってどういう…」

「ほら。会社に遅刻したくないんでしょ？」

裕美は俺の言葉を遮り、強引に手を引っ張る。俺は裕美にそれ以上のことを聞くことができなかった。会社に着いたのは出社時間2分前だった。俺は自分の席に座って、仕事を始める。何も考えたくない。そんな時は仕事に集中するのみ。しかし、それを妨げるように…

「今日、病院行きなよ」

隣の席から邪魔が入る。せつかく考えないように仕事してるのに…この人が隣じゃダメだ。

「仕事中なので黙っててください」

俺は裕美にそう言って、再び仕事に集中する。その後も何回も裕美は俺に話しかけてきたが、全て無視した。しばらくすると裕美は諦めたのか、俺に話しかけなくなった。そして時間はあっという間に退社時間になった。幸い今日は残業なども無い。

「ふう終わった」

俺は思いっきり背筋を伸ばした。これほど集中したことなんて人生で初めてかもしれない。

「病院」

そこに隣から悪魔の囁きが。俺は現実に戻された気がした。

「病院、病院って、病院に何かあるんですか？」

「さあ？ でも行った方がいいわよ。大変なことになってるみたいだし」

大変なこと…？ 一体、何が起こったって言うんだ？ 俺は少し気になったので病院に行くことにした。

「佳奈！ 病院に行こう」

「突然どうしたの？」

当然というか…予想通りというか…佳奈は驚いて、俺のところに

やってきた。

「何か病院が大変なことになってるみたいなんだ」

「大変なこと？」

「うん。行ってみよう」

俺がそう言っていると佳奈は少し複雑そうな顔をしてから、

「じゃあ、ちょっと待ってて。すぐに準備して行くから」

と言った。俺は佳奈を待っている間、考え事をしていた。病院で起こってること、佳奈のこと、裕美のこと、田中医師のこと…いろんなことが俺の頭を駆け巡る。

「たっちゃん、行こう」

そんなことをしていると佳奈が準備を終え、やってきた。そして、俺と佳奈は病院へと向かった。

第18話 決意と予感（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

達也は佳奈のおかげで立ち直りました。そして、裕美がしつこく言う『病院』。はたして病院で何が起きているのか？

第19話もよろしく願います！

第19話 病院で…（前書き）

第19話目です！

裕美が『病院』と何度も言う理由は…？
そして…

第19話 病院で…

病院に到着した俺と佳奈を待っていたのは一枚の張り紙だった。

『誠に勝手ながら今日から数日の間、休まさせてもらいます』

その紙には、この一文のみが書かれていた。病院が休ませてもらうって…どういうことだ？

「ねえ、どうしたんだろう？」

佳奈が不安そうに俺に尋ねる。

「わかんないけど…」

俺と佳奈が話し合っていると病院の中から看護師らしき一人の女性が出てきた。

「あの！ すみません」

「はい？」

俺が話しかけると気が付いたのか、こっちに来てくれた。

「一体、何があったんですか？」

俺は早く真相が知りたかった。

「何も知らないんですか？ そりゃあそうですよね…突然のことでしたし…」

なかなか看護師さんは話してくれない。もしかして話にくいとか…？ それから少しして、看護師さんは話し始めた。

「今日、私が病院に来たら…田中医師が首を吊って自殺してたんです。病院の中で。私はビックリして、すぐに警察に通報しました。それから、緊急会議が開かれて…」

俺は信じなくなかった。それは佳奈も一緒のことだと思う。あの田中医師が自殺したなんて…

「そ…そんなの嘘よ！」

佳奈が叫ぶ。看護師さんは何も言わず、下を向いている。

「だから感情なんていらないのよ」

俺と佳奈が田中医師の自殺にショックを受けていると、いつの間にか裕美がいた。

「アンタは…アンタは何が楽しいんだ！」

俺は裕美の胸ぐらを掴んでいた。もう限界だ…今までいろんなことをされた。耐えてきたけど…さすがに限界だ。

「楽しい？ たっちゃん、それは違うよ」

「『たっちゃん』って呼ぶなよ！ 呼んでいいのは佳奈だけなんだよ！」

俺は怒りで気が狂いそうだった。この人は…この人だけは絶対に

許せない。

「たっちゃん、落ち着いて」

佳奈に抑えられ、俺は我を取り戻す。

「ゴメン……」

俺がそう言っていると佳奈は首を横に振り、裕美の方を見た。

「あなたは何がしたいんですか？」

佳奈がそう尋ねると裕美は笑って、

「前も言った通り、感情を操りたいだけだよ」

と言った。感情を操ることは危険なことだ。なのに、この人は…

「私、あなたに感情を操られていた時、すごく不快で辛かった」

「あら、そう」

裕美は、そんなことどうでもいいと言うかのような返事をした。

「あなたは人の感情がわかるから、辛いと思う。けど、考え方によつては感情がわかるということは良いこともある」

「……………」

裕美は黙り込んだ。どうやら佳奈の言いたいことがわかってるみたいだ。

「あなたもきつとわかってるはず… たっちゃんと接したのは偶然なんじゃない。あなたは本気でたっちゃんを助けたいと思ってた」
「やめろ！ やめろ…」

裕美にとって佳奈の言葉は胸に刺さるのだろう。

「あなたは悪い人なんかじゃない。私は… そう信じてる」

俺は、ただ佳奈を見ているしかなかった。あんなに酷いことをされたのにも関わらず、佳奈は裕美が『悪い人じゃない』と信じている。正直、俺には考えられなかった。

「だから… もうこんなこと、やめましょう」

佳奈は膝から崩れ去っている裕美に近寄り、手を差し伸べた。裕美は佳奈の手を握り締めた。

「何で… 何であなたは私に…」

裕美は泣いていた。今までの素顔は演技だったかもしれない。けど… 今の裕美は…

「さっきも言っただけど… あなたは悪い人じゃない。というか、悪い人になっちゃいけない」

俺は佳奈を見て驚いた。あれ… 今、一瞬だけ…？

「どうしたの？ たっちゃん？」
「い… いや、何でもない」

俺の見間違いかな…？ 佳奈が笑った気がしたんだが…

「ごめんなさい。ごめんなさい…」

その後、裕美は泣きながら、『ごめんなさい』と何度も謝った。

「達也くん、佳奈さん…本当にごめんなさい。私…」
「もういいって言ったじゃないですか」

俺は、そう言って佳奈を見た。佳奈は大きく頷いた。

「ありがとう…本当にありがとう」

裕美さんは俺たちの前に2度と姿を現さないとまで言っていた。

「裕美さん、私の笑顔を取り戻すために手伝ってくれませんか？」

佳奈がいきなりそんな提案をする。一体、どうするつもりだ…？

「私にできることなんて…」

突然のことに裕美さんは困惑している。

「裕美さん、あなたは人の感情がわかる。ということは人がどんな時、笑うのかがわかる。それをもとにしたら…もしかしたら、私の笑顔が戻るかもしれないって思ったんだけど… たっちゃん、ダメかな？」

佳奈は困ったというように俺を見る。

「いいんじゃないか？ まあ裕美さん次第だけど」

そう言っ て俺は裕美さんを見る。

「私で… いいの？」

「裕美さんだからこそ、頼むですよ」

佳奈が力強くそう言っ と、

「じゃあ… お願いします」

裕美さんは深々と頭を下げた。こうして俺と佳奈、それに裕美さんを加えて佳奈の笑顔を取り戻すことになった。

第19話 病院で…（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

佳奈の言葉が裕美に響いて、裕美は自分がやってきたことに気がつきました。そして、裕美も一緒に佳奈の笑顔を取り戻すことに。

第20話もよろしく願います！

第20話 風邪（前書き）

第20話目です。

佳奈の笑顔を取り戻すために…達也と裕美が考えた方法とは？

第20話 風邪

翌日、俺は会社で仕事をしながら佳奈の笑顔を取り戻す方法を考えていた。

「うーん、どうしたら…」

佳奈の笑顔を取り戻すって口では簡単に言える。しかし、いざ何かをやるうと思うと何も思いつかない。

「どうかしたの？」

隣から裕美さんが話しかける。俺と裕美さんは上司に聞こえないように話し始めた。

「いや、佳奈の笑顔を取り戻すにはどうしたらいいかなって考えていて…」

「私、考えたんだけど、思い出を振り返るのって大事だと思うよ？」

思い出か…でも、佳奈は…

「佳奈と初めて出会った場所に行っただけです。でも…」

「何、落ち込んでるのよ。思い出って最初に会った場所だけじゃないでしょ？」

確かに裕美さんの言うとおりだった。俺は佳奈を初めて出会った場所にしか連れて行ってない。他にもたくさん思い出はある。

「土日は、いろんな場所に連れて行ってあげようかな」

「いいと思う」

俺は土日、佳奈と思い出の場所を巡ることにした。

土曜日になった。俺は…

「うゝ」

ベッドに横になっていた。風邪をひいてしまったのだ。

「大丈夫？」

佳奈がそう言いながら、俺の額に冷えたタオルを乗せる。

「もっだらしないんだから…」

そう言ってやってきたのは裕美さん。俺は裕美さんに連絡しないでいいって言ったのだが…佳奈が連絡していた。佳奈と裕美さんは、すっかり仲良しになっていた。俺は、その光景を見てホッとする。もしかしたら佳奈は裕美さんを意識してしまうのでは…と思ったのだが、意識しているのは俺の方だった。

「ん？ どうしたの？」

どうやら佳奈は俺の視線に気づいたみたいだ。不思議そうに俺を見る。

「何でもない」

俺は、やっと平和な生活に戻れたと思った。あとは佳奈の笑顔を取り戻せば…俺は起き上がろうとする。

「ほら、体調悪い時くらい私のことは考えないで、ゆっくり休むの」

佳奈は俺にそう言い、俺の身体をベッドに戻す。こんな大事な時に風邪とは…

「佳奈さん、私、そろそろ帰るね。もうこんな時間だし…」

裕美さんの言葉に俺は時計を見る。いつの間にか午後7時を過ぎていた。

「うん。今日はありがとう！ たっちゃんも明日には元気になってると思うから、また明日来て」

「ありがとう。じゃあ、また明日。達也くん、佳奈さんに迷惑かけちゃダメだからね」

「……わかってるよ」

そう言い残し、裕美さんは帰って行った。佳奈は裕美さんを見送りに玄関へ向かう。

「あーあ、何で風邪ひいてんだろ…」

今日は行きたいところがたくさんあったんだけどな…そんなことを考えていると佳奈が戻ってきた。

「どう？　だいぶ良くなった？」

「うん。佳奈と裕美さんのおかげで少し楽になったよ」

2人は朝からずっと俺の看病をしてくれていた。そのおかげで朝よりかなり良くなっていた。

「たっちゃん、裕美さん変わったよね」

佳奈は俺の横に座り、裕美さんの話を始めた。

「うん。そうだな」

「私、裕美さんを救えたかな？」

「佳奈以外の誰が裕美さんを救ったんだよ」

あの時、佳奈が裕美さんに言葉をかけなければ、裕美さんを止める人は誰もいなかっただろう。きつと止めれなかった。でも、佳奈の言葉が裕美さんの心に届き、裕美さんは佳奈によって救われた。

「私ね…裕美さんに会えてよかったんだ」

俺には、その言葉の意味がわからなかった。

「裕美さんのおかげで感情のことを学べた気がする。たっちゃんに酷いことを言ったのも私は感情任せだったなって」

「……………」

俺には何も言うことができなかった。佳奈は話を続ける。

「でもね…一番はやっぱり、たっちゃんがそばにいてくれること」

「佳奈…」

「だから…たっちゃん、ありがとう」

そう言った佳奈は、まだぎこちないが笑ってくれた。完全な笑顔ではない。けど、確実に一歩、そしてまた一歩、俺たちは進めてる。そう思った。

第20話 風邪（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ここで1つみなさんに報告です。『空っぽの心』のネタが尽きてきました…（汗）。21話目はもしかすると遅くなるかもしれませんが…。ただ、なるべく早く投稿できるように頑張って書きますので、よろしく願います！

第21話 思い出の場所？（前書き）

第21話目です！

土曜日は風邪を引いてしまった達也。日曜日は…？

第21話 思い出の場所？

日曜日。俺は、すっかり元気になっていた。昨日の風邪が嘘みた
いだった。

「達也くん、元気になった？」

午前10時頃、裕美さんが俺の家に来た。

「元気ですよ。昨日は迷惑かけちゃってすみません」

「達也くんが元気ならいいのよ。ね、佳奈さん」

裕美さんが佳奈にそう言うと言ったと佳奈は礼をして『ありがとうござい
ました』と言った。裕美さんは、そんな佳奈を見て笑っていた。

「ところで今日は何か予定でもあるの？」

俺は今日のことを決めていた。ただ、それは佳奈でさえ知らない。
俺しか知らないのだ。

「今日は、たっちゃんがどこかに連れて行ってくれるみたいです」

「そうなんだ。じゃあ、私は帰りますかね」

「すみません。せっかく来てもらったのに…」

佳奈が謝ると裕美さんは『いいの、いいの』と言った。そして、

「達也くん、しっかりね」

と俺の耳元で囁いた。俺は静かに頷く。佳奈は不思議そうに俺ら

を見ている。

「じゃあ、また来るね」

そう言って裕美さんは帰った。佳奈は、まだ不思議そうに俺を見ている。

「ねえ。裕美さんと何を話してたの？」

「別に何でもないよ」

佳奈に本当のことは言えない。佳奈は納得いかない感じだったが、これ以上は聞かないでくれた。

「そういえば… たっちゃん。どこに行くの？」

「内緒」

今日は佳奈には一切、何も言わずに行くことにしていた。ゴメン、佳奈。

「楽しみにしてるよ」

佳奈は、そう言って出発する準備を始める。俺も準備をしようと思った。それから15分。俺も佳奈も準備を終え、俺と佳奈は目的地へと出発した。

まず最初にやってきたのは…

「ここは…私たちが初めてデートした遊園地？」
「そうだよ」

俺と佳奈が付き合い始めてから最初のデートが遊園地だった。俺が1日パスポートを2人分用意して佳奈を誘った。後から聞いた話だと佳奈はデートの日、予定が入ってたらしい。俺とのデートのために予定を断って、来てくれた。

「何でここなの？」

佳奈が不思議そうに俺に言う。

「いいから。ほら行くぞ」

俺は詳しい理由を言わずに佳奈を半ば強引に遊園地の中へ連れていった。

「佳奈、何か乗りたいものある？」

「あるけど…チケットあるの？」

佳奈にそう言われ、俺はポケットから回数券を取り出した。

「じゃーん。さっき買いました」

俺が回数券を見せると佳奈は俺を見て、『ありがとう』と言った。そして、

「じゃあ私はジェットコースターに乗りたい」

と言った。前にデートに来た時も佳奈は最初にジェットコースターに乗りたいと言っていた。

「佳奈ってさ、ジェットコースター好きなの？」
「うん。絶叫したりするの好きだよ」

俺は『そうなんだ』と言って、苦笑いをする。佳奈とは対照的に俺は苦手だ。

「ほら、行くよ」

佳奈も俺が苦手なことは知っている。佳奈は早く行きたいのか俺の手を引っ張って、どんどん歩いていく。ジェットコースター乗り場に到着すると日曜日ということもあり、列になっていた。

「30分くらいかかるって」

佳奈が残念そうに俺を見る。

「まあ、まだ午前中だし、ゆっくりしようぜ」

そんな話をしながら順番を待つ。俺は逃げ出しそうな自分を抑えていた。列はゆっくり前に進む。

「たっちゃん、大丈夫？」

次は俺たちに順番が回ってくる。今になって佳奈は俺のことを心配する。

「だ…大丈夫だよ。心配すんなよ」

「そう？ 苦手じゃなかったっけ？」

「苦手だけど…大丈夫」

ここまできて『やめよう』なんて言えない。俺は意を決した。そして、前のジェットコースターが戻ってきて、乗っていた人たちが降りる。全員が降り、俺と佳奈は係員に案内されてジェットコースターに乗る。ゆっくりとジェットコースターは動き出す。

「大丈夫、大丈夫…」

俺は必死に自分に言い聞かせた。ジェットコースターは最高地点に到着する。そして…

「うわああああー」

一気に降下し、スピードがどんどん上がる。俺は、それからの記憶があまりない。気付くとスタート地点に戻っていた。

「たっちゃん、大丈夫？」

横で佳奈が心配そうに俺を見る。かろつじて俺は意識を保っていた。

「う…うん」

今の俺には、これしか言えない。言葉が全然、浮かんでこない。ジェットコースターを降りた俺と佳奈は昼ご飯を食べるために遊園地にあったレストランに入った。

「ジェットコースター楽しかったね」

ご飯を食べながら、佳奈がそう言う。佳奈は時々、意地悪なんだよな。俺の気持ち知ってるくせに…。

「佳奈が楽しかったなら、よかったよ」

「たっちゃんは楽しくなかった？」

「記憶にない」

本当に怖かった。死ぬと思ったくらいだ。

「ねえ、次は何に乗る？」

ご飯を食べ終わった俺と佳奈は、これからの話をしていた。

「佳奈が乗りたいのでいいよ」

「じゃあ、今度はあのジェットコースター」

即答だった。

「ま…待て、佳奈。またジェットコースターに乗るのか？」

「そうだよ」

当然のことのように佳奈が言う。やっぱり佳奈は意地悪だ。こうして俺の地獄の時間が再び始まったのだ…。

第21話 思い出の場所？（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

思い出の遊園地にやってきた達也と佳奈。
何か達也は振り回されてる気が…。

第22話目も頑張ります！

第22話 思い出の場所？（前書き）

第22話目です！

ジェットコースターで佳奈に振り回されている達也の運命は？
そして次に向かった場所は何処？

第22話 思い出の場所？

午後4時。佳奈は満足したのか、ようやく遊園地を出た。それまで、ほとんどずっとジェットコースターに…思い出しただけでも恐ろしい。

「たっちゃん、楽しかったね」

佳奈は上機嫌だ。それに比べて俺は…

「う…うん。楽しかった…ね」

自分から佳奈を遊園地に連れていったので、佳奈が楽しんでくれば成功なのだが…俺が楽しめたのは遊園地にいた約6時間のうち、1時間くらいだっただろう。

「次はどこに行くの？」

「もう少しで着くよ」

遊園地を出て、次にやってきたのは…

「海だー」

佳奈と付き合ってから何度も来ている海だ。デートの終わりは必ずここと言っても過言ではない。

「ここで花火したの覚えてる？」

「覚えてるよ。あの日は特別だもん」

付き合って3ヶ月経った頃のデート。俺と佳奈は、ここで花火をした。

「たっちゃんが初めて私のことを愛してるって言うてくれたよね」

佳奈は、そう言うて恥ずかしいのか下を向く。そう、あの日は初めてだらけだった。

「たっちゃん、今日もありがとね」

空が夕焼けに染まる頃、海に到着した俺と佳奈は夕日を見ながら話していた。

「俺さ、佳奈に出会えて幸せだよ」

俺は不意にこんな言葉が出てきた。付き合い始めてもう3ヶ月。あっという間だった。

「私もだよ。たっちゃんに出会ってなかったら、今の私はいないよ」

そう言っ て佳奈はニコツと笑う。 やっぱり佳奈の笑顔は輝いてる。俺は自然と口から言葉が出ていた。

「佳奈、愛してる」

「たっちゃん… やっと言っ てくれた」

「えっ？」

「付き合っ てから、そんなまっ すぐな言葉を聞いたことなかつ たから… 不安だっ たんだよ？」

佳奈は俺の方を向いて言っ た。

「私も… 私も愛してる」

そして俺と佳奈はキスをした。 優しく、一瞬のキス。 付き合っ てから初めてのキス。

「……………」

お互い何も言わずにもう一度、唇を重ねる。 今度は長く、深いキス。 その日、俺と佳奈は長い夜を海で過ごした。

「佳奈、今日のデートはどうだった？」

思い出のある遊園地に行き、初めてだらけの海に来た。きっと佳奈は不思議に思っただろう。

「楽しかったよ。たっちゃんに行く場所は、どこでも楽しい」

こんなことを言ってくれる佳奈が隣にいてくれる俺は幸せ者だなと感じた。ジェットコースターは勘弁してほしいけど…。

「……たっちゃん、ありがとね」

少しの沈黙の後、佳奈が言った。

「いきなりどうした？」

「たっちゃんさ…今日のデートって私のために計画してくれたんでしょ？」

「……………」

俺は何も言えなかった。

「たっちゃんが黙る時は当たってるってことだね。たっちゃんは優しいね。いつも私のことを考えてくれて」

「当たり前だろ。佳奈は俺の…」

そこまで言って言葉に詰まる。

「『俺の』何？」

「俺の一番、大切な人なんだから」

俺がそう言つと佳奈は静かに笑つた。

「佳奈！」

俺はつい叫んでしまった。今までとは明らかに違う佳奈の笑顔。

「どうしたの？」

「佳奈、笑える？」

俺がそう言つと佳奈は首を横に振つた。

「笑えないよ。たっちゃんの言葉が嬉しいって感じていても笑えないよ……」

「ごめん」

このままだと佳奈が泣いてしまう。

「でも…私、最近幸せなんだ。裕美さんと仲良くできたし、こうやってたっちゃんと一緒に過ごせる。私は幸せ者だって」

「佳奈…俺も幸せ者だよ」

「たっちゃん…ありがとう」

佳奈は、そう言つて目を静かに閉じた。

「佳奈？」

俺が呼びかけても何の返事も無い。一体、どうしたのだろうか？
とりあえず俺は佳奈を車に連れていく。その間も佳奈を何度も呼んだが…。俺の目から涙が溢れる。

「佳奈！ 返事をしてくれ！ 頼むから…」

その日、佳奈が俺の呼びかけに返事をする事はなかった…。

第22話 思い出の場所？（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

突然、返事の無くなった佳奈。一体、何が？ 物語は終盤へと進みます。

第23話も頑張ります！

第23話 感情不足病（前書き）

第23話目です！

物語は終盤へ。突然、返事をしなくなった佳奈は…？

第23話 感情不足病

俺は佳奈の名前を呼びながら病院へと向かう。一刻も早く、ただそれだけだった。病院に到着すると佳奈は、すぐに集中治療室へと運ばれる。俺は祈る気持ちで待合室にいた。

「達也くん…」

俺が病院に到着して数分。裕美さんも到着した。裕美さんは俺の隣に座る。

「佳奈さんは？」

急いで来たのか、裕美さんの息が上がっている。

「今、集中治療室に入ってる」

俺は、なるべく裕美さんに心配をかけないように平然を保つようにした。それと同時に俺自身に『佳奈は大丈夫だ』と言い聞かせた。

「達也くん…無理してない？」

裕美さんが俺を見て言う。俺はドキッとした。

「な…何でそんなこと言うんですか？」

「達也くん、私を誰だと思ってるの？」

裕美さんにそう言われ、気がついた。裕美さんは他の人の感情がわかる。今の俺の感情だって…

「達也くん、あなたは1人じゃないんだよ。我慢しないで…泣きたい時は泣いていいんだよ?」

裕美さんの言葉で俺は限界だった。涙が止まらなかった。俺は裕美さんの隣で1時間ずっと泣いていた。

「佳奈さんは非常に危険な状況です」

佳奈が集中治療室から出てきたのは病院に到着してから2時間後のことだった。

「どういう…ことですか?」

「佳奈さんは…感情不足病という病気にかかっています。今のところこの病気に対する治療法は、ありません」

感情不足病…その病気を治すために佳奈といろんなことを乗り越えてきた。きつと今回も乗り越えられる…そんな風に俺が思っていた時だった。

「この病気は、かかった人をゆっくり蝕んでいきます。佳奈さんはもう…」

「嘘だろ！　嘘と言えよ！」

俺は医者に掴みかかっていた。裕美さんが必死に止める。

「達也くん！　落ち着いて！」

裕美さんに抑えられ、俺は膝から崩れ落ちた。

「先生…佳奈は死ぬんですか？」

「あとどれくらい持つかわかりません…」

絶望的だった。『死ぬ』…この言葉が身近に迫っている。そんなこと想像もしていなかった。先生の話を聞いた後、俺と裕美さんは佳奈の寝ている病室へと向かった。

病室に入ると佳奈は静かに眠っていた。今は安定してるみたいで、大丈夫らしい。それを聞いただけで俺はホッとする。

「佳奈さん…」

裕美さんも心配そうに佳奈を見る。

「佳奈…俺がついてる。大丈夫」

俺は佳奈にそう言ったが、自分自身を落ち着かせるためでもあった。『大丈夫』、とにかくそう願うしかなかった。

「達也くん、待合室に行きましょう」

俺に気を使ったのか、裕美さんがそう言う。とてもじゃないが、今の佳奈を俺は見えてられない。

「佳奈、大丈夫だからな」

そう言って、俺は佳奈にキスをしてから病室を出た。待合室に行くのと先に行ったはずの裕美さんがいない。俺は、とりあえずイスに座って待つことにした。待つこと数分、

「はい」

後ろから声がした。振り返ると裕美さんがいた。手には缶コーヒ―があった。

「ありがとうございます」

裕美さんから缶コーヒ―を受け取る。裕美さんは俺の隣に座って、

「佳奈さん、大丈夫だよね…？」

と言った。俺は何と言えいいのかわからなかった。もちろん俺自身は佳奈が助かると信じている。けど…どうしても自信を持って言えなかった。結局…

「正直、わからないです…」

こんな言葉しか出てこなかった。

「佳奈さんって何であんなに優しくできるんだろう？」

「佳奈は、いつも俺のことを『優しい』って言ってくれます。だけど…本当に優しいのは佳奈の方です」

「達也くんはさ…佳奈さんのどこが好きなの？」

「え」と…全て好きですけど…やっぱり笑顔が好きです」

俺がそう言うのと裕美さんは頷いている。一体、何なんだ？

「私ね、佳奈さんに教えてもらったんだ。人間には感情が大切だって。人間は感情を失えば何もできなくなる。人間関係も生活も仕事も…どんなことも。私は自分の経験だけで『感情はいらない』と決めつけていた。だけど…私は佳奈さんと出会って知った。感情は人間にとって大きいものだって。それは達也くんを見ているともっと感じる」

「俺？」

「うん。達也くんが佳奈さんを想う気持ち…それを聞いていると私は間違っていたんだって感じる」

「裕美さん…」

裕美さんもきつとたくさん苦しんだはずだ。俺や佳奈には言わないが絶対に…そんなことを考えていた時だった。

「佳奈さんが目を覚ましました！」

看護師さんがそう叫びながら俺と裕美さんのところに走ってやってくる。俺と裕美さんは急いで佳奈のいる病室へと向かった。

第23話 感情不足病（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

感情不足病：現実にあつたら、怖いですね。人間は感情があるからこそ、いろんなことができる。それを失ったら…考えただけで怖いです。

第24話目も頑張ります！

第24話 目が覚めて…（前書き）

第24話目です！

目を覚ました佳奈。駆け寄る達也と裕美。そこに待っているのは…？

第24話 目が覚めて…

「佳奈！」

俺は病室に入るとすぐに佳奈の名前を叫んだ。佳奈のところへと駆け寄ると佳奈は、

「たっちゃん…裕美さん…」

と静かに言った。目を覚ましたと言っても意識はあるのだが、はつきりしている訳ではない。虚ろな感じだ。

「佳奈！ 大丈夫か！」

「うん…心配掛けてごめんね…」

俺は首を横に振る。佳奈が謝る必要なんて何もない。佳奈は何も悪くないのだから。

「裕美さん、ありがとうございます」

「佳奈さん…」

裕美さんは今にも泣きそうだった。

「たっちゃん…私と過ごして楽しかった？」

佳奈が突然、そんなことを言いだす。俺も泣きそうだ。

「当たり前だろ。佳奈といて、楽しくないことなんて何もないよ。全部、楽しかったよ」

「そつか。ありがとう。たっちゃんと出会って、もう2年経ったんだね…」

「そうだな」

思えば出会って2年。様々なことがあった。

「最初は公園だったね。桜が綺麗で、たっちゃんと出会って…あの時は助けられたな」

「助けたのかな？ 佳奈が強かったただだよ」

「そんなことないって。それから付き合って、デートも何回も行って…」

いつの間にか病室には俺と佳奈しかいなかった。みんな氣を使ってくれたのだろう。

「遊園地も水族館も動物園も海もデパートも…いろんなところに行ったよな」

「うん。デートは、いつもたっちゃんが計画してくれて…いつも楽しかった」

「俺も佳奈といれるだけで楽しかったよ」

デートは、いつも心配だった。佳奈は楽しんでいてくれるのか、俺といて楽しいのか…今日、佳奈は言ってくれた。俺は、すごく嬉しかった。

「でもね…楽しくないデートが2回だけあったんだ。1回はデート中にデパートでたっちゃんが男の人に刺された時」

「あの時は佳奈を守ることだった…」

俺もあれは焦った。まさか刺されるなんて思っていなかったから。

「たっちゃんが守ってくれたのは嬉しかったよ。でも…すごく心配で、苦しかった」

「ゴメンな」

「もう1回は、たっちゃんとケンカした時」

あれは半年くらい前だろうか。デート中に次に行く場所でケンカをした。結局その日のデートは、そこで終了。

「あれから1週間くらい連絡も取らなかったよな…」

「絶対にたっちゃんに嫌われたと思って…」

「俺も耐えられなくなって、メールした。佳奈がいなきゃダメだなって」

あの1週間は俺の人生の中で1番、苦しかった1週間と言えるだろう。

「私も思ったよ。たっちゃんがいなきゃダメだなんて」

「たくさんあったな。2年って長いようで短いよな」

「うん…。そうだね」

「佳奈、ありがとう」

俺がそう言っていると佳奈は今までになかった最高の笑顔で、

「たっちゃん、本当にありがとう。これからも…」

そう言い、俺に手を伸ばそうとする。そして…佳奈は静かに目を閉じた。

「佳奈…？ 佳奈！ 佳奈！…」

俺は佳奈の身体を揺すりながら、何度も大切な人の名前を叫ぶ。
嘘だ！　嘘だ！　嘘だ！　こんなの夢に決まってる！　そうだ、夢だ！

「達也くん…」

俺の声が聞こえたのか裕美さんと担当医師が病室に入ってくる。
すぐに佳奈は集中治療室へと運ばれた。

「佳奈…佳奈…」

俺は立ち上がれなかった。病室で泣きながら、目を覚ましてくれることを信じて名前を呼び続けた…。

佳奈が集中治療室に入ってから、1時間。佳奈は亡くなった。俺は医者から、そのことを告げられたが何も言う気にはなれなかった。病室で1人、現実を信じないで佳奈の名前を呼びながら、泣き続けた。いくら泣いても、名前を呼んでも、佳奈が帰ってくることはない。だけど、俺は…

「な…何で…佳奈…佳奈…」

『佳奈が亡くなった』そんなこと信じれるわけがなかった。まだ俺は佳奈を幸せにしていない。幸せにするって約束したのに…佳奈は最後に笑ってくれた。2年間で最高の笑顔だった。せつかく…せつかく笑顔が戻ってきたのに…

「……………」

その時、後ろから優しく抱きしめられた。

「裕美…さん？」

「達也くん、私そばにいてもいい？」

「はい…」

俺の目からは涙が止まらなかった。裕美さんも泣いているみたいだ。俺と裕美さんは佳奈のいた病室で朝になるまで泣き続けていた…。

第24話 目が覚めて…（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

佳奈…達也と裕美の願いは届かず。でも佳奈は幸せだったでしょうね。こんなにも大切な人に見守られていたのですから。

次の話で『空っぽの心』は最終話です。

第25話 心（前書き）

最終話です。

佳奈のいない生活に達也は…？

第25話 心

朝になって俺と裕美さんは、佳奈のいた病室から出た。ずっと泣いていたせいか、お互い目が真っ赤になり、腫れている。俺は医師や看護師さんに礼をして、病院を出た。

「達也くん」

病院から出る時、裕美さんに呼び止められた。

「何ですか？」

「後で…達也くんの家に行っていていい？」

「大丈夫ですよ」

俺は裕美さんと約束をして、自分の車へと向う。運転席に乗り、助手席をしばらく眺めていた。つい数時間前までは佳奈が乗っていた。そんなことが信じられなかった。

「あれ？」

その時、1枚の紙が助手席に落ちていることに気がついた。俺は手に取って見てみる。そこには…

『たっちゃんへ』

この言葉を見た瞬間、俺は紙から目をそらした。見たくない。怖い。俺の目からは止まらなかったはずの涙が再び流れ出す。佳奈からの手紙。読まなければならぬことはわかっている。でも、読みたくな。いや、読まなきゃダメだ。そう思って俺は再び手紙を見る。

『今日もデート、楽しかったよ。いきなり何も言わないでデートすることになったから最初は心配だったけど、楽しかった！いつもありがとね！私、今でも覚えてるよ。たっちゃんが最初に言ってくれたこと…』俺、佳奈さんを幸せにしたいです』って。私は今、すごく幸せです。たっちゃんは、ちゃんと約束を守ってくれたね。これからもよろしくね！』

手紙を読み終えた時、手紙は俺の涙でぐちゃぐちゃになっていた。『これからもよろしくね！』…佳奈が静かに目を閉じた時も『これからも…』と言っていた。きっとこのことを俺に伝えたかったのだろう。

「佳奈…」

俺は、いろんなことを思い出しながら家に帰った。

家に到着した俺は自分の部屋に入った。俺の手には…カッター。俺は何も考えずにカッターの刃を手首にあてる。佳奈がいないのに俺が生きている意味は無い。それしか考えなかった。そして手首を…

「達也くん!!」

後ろから声がして、振り返ると裕美さんがいた。

『バシッ!』

裕美さんは俺を見るなり、俺の頬に思いっきりビンタをした。カッターを俺から取り上げ、近くにあったゴミ箱に捨てる。俺は呆然とした。

「バカじゃないの!? 何やってるのよ!」

「裕美さん…俺、死にたいんです」

心からの叫びが声に出た。

「達也くん、あなたがそんなに弱いと思わなかったわ。佳奈さんが亡くなったのは達也くんにとって辛いと思う。けど…だからって何であなたが死ぬのよ!」

「佳奈のいない世界に俺は…今は空っぽの心なんです…」

そう言つて、言葉が詰まる。言いたいことがたくさんありすぎて何を言えばいいのかわからなくなった。

「私は、お父さんを失った。自分のせいで。私は自分自身を責めた。けど…同時にお父さんの分まで生きようと思った。達也くんは佳奈さんの分まで生きなくていいの?」

「それは…」

裕美さんの言葉に俺は胸が痛かった。裕美さんも大切な人を失っ

ている。

「達也くんが死んで、佳奈さんは喜ぶと思う？ 喜ぶわけないじゃない！ あなたの心が空っぽの心なら、少しずつでいいから心を満たしていけばいい。1日、1ヶ月、1年……どれくらいかかってもいい。私は、ずっと達也くんを見守ってるから」
「……………ごめんなさい」

裕美さんに言われて、俺は自分が何をしようとしていたのかを気付かされた。佳奈がいないからこそ、これからは生きてくても生きれなかった佳奈のために一生懸命、生きなきゃ。

「ありがとうございます。俺、目が覚めました」

「佳奈さんもきつと見守ってくれてるわよ。『たっちゃん』って笑顔でね」

裕美さんがそう言って笑う。俺も笑った。

「私は、そろそろ帰るね。達也くん、ゆっくり休むんだよ」

「はい。ありがとうございます」

裕美さんが帰った後、俺はベッドに横になった。今でも佳奈が亡くなっただなんて信じられない。けど、佳奈が帰ってくるわけでもない。俺は佳奈を幸せにできたのだろうか？ ポケットから手紙を取り出す。『私は今、すごく幸せです』。俺が佳奈をどれだけ幸せにできたかわからない。けど……佳奈は幸せと感じてくれたみたいだ。俺は、それだけで幸せだった。佳奈、今何してる？ 俺、佳奈のためにも頑張って生きてくよ。だから、佳奈は少し休んで。俺の空っぽの心は佳奈によって満たされていた。そして今、再び俺の心は空っぽの心になってしまった。けど……これから少しずつでも満たし

ていきたい。満たされた時は必ず佳奈に報告するよ。俺は、そう決意して目を閉じた。

第25話 心（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

『空っぽの心』は、これにて完結となります。最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました！ ここまで書き続けられたのは、みなさんのおかげです。

地震の関係もあり、『空っぽの心』を更新してもいいのが悩みました。でも、更新させてもらうことにしました。1つは数少ないかもしれないですが、この作品の更新を待っていてくれる人がいてくれるかもしれないと思ったからです。2つ目は僕自身、小説を読むことも書くことも大好きだからです。

新作も今、考えてます。またよろしくお願いします！ 『空っぽの心』を読んでくれたみなさん、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2580p/>

空っぽの心

2011年3月21日17時33分発行